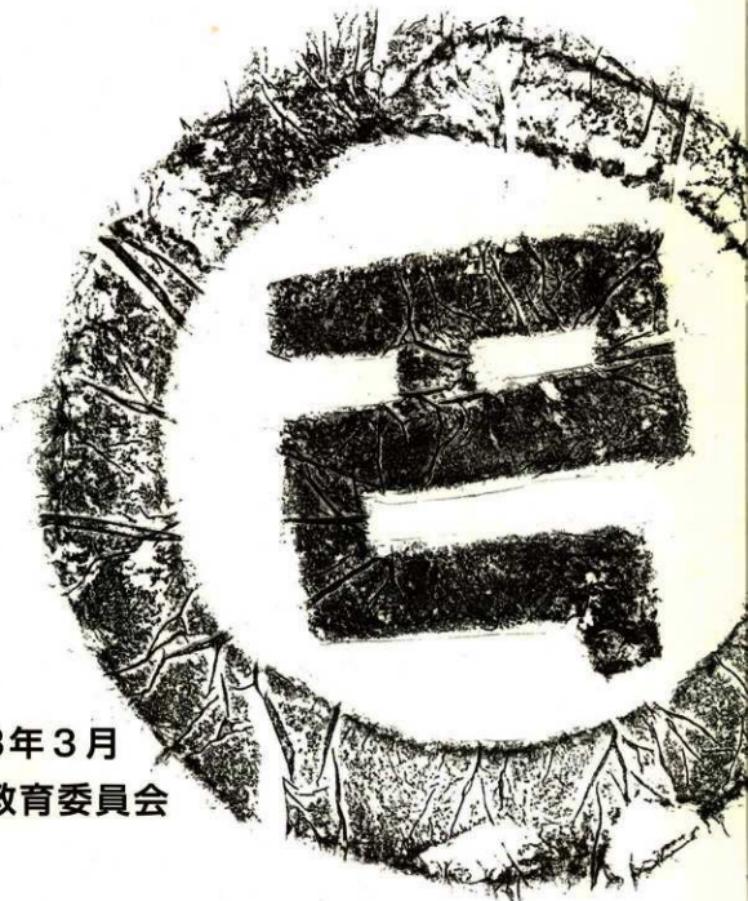


史跡富田城跡

THE TODA CASTLE RUINS

環境整備事業報告書Ⅱ



2003年3月
広瀬町教育委員会

序

広瀬町は戦国の名族出雲尼子氏6代にわたる170年間の本拠地として、またその後の江戸時代には松江松平家の支藩である広瀬藩の城下町として栄えておりました。そういう歴史状況の中にあり、広瀬町内には数多くの歴史的文化遺産が沢山あります。中でも代表的な富田城跡は中国地方を代表する山城跡として、昭和9年に国の史跡に指定されました。

城跡は廃城後およそ400年の間に石垣等の破損が進んでいましたが、社会や人々の生活・文化環境の変化に伴い、史跡への関心が高まったことから、城跡を訪れる人々にとっての憩いの場または歴史学習の場となるよう早急な保存整備が強く求められるようになりました。

このような状況を受けて、広瀬町では平成2年度に史跡公園整備計画を立て、平成5年度から史跡富田城跡の整備事業に着手し、以後現在に至るまで継続して富田城跡の発掘調査並びに整備事業に取り組んで参りました。

今回、この10年に渡る整備事業の区切りとして、この報告書を刊行する運びとなりました。これまでの調査で解明された様々な成果は城の規模に比べればまだ部分的なものであり、更なる解明が求められます。ついては、今後も多方面からの調査・研究とこれに基づいた整備が必要と考えております。

富田城跡が、郷土が誇れる文化財として、また、より身近な史跡公園等として活用できるようこれからも努めて参りたいと念じております。

末筆となりましたが、ご指導頂きました文化庁、島根県教育委員会を始めとする関係機関そして史跡富田城跡総合整備委員会の先生方、そして発掘調査及び整備工事に従事されました方々や、ご指導・ご協力いただいた皆様にお礼を申し上げると共に、本書が地域の歴史解明に役立つことを念願致しております。

2003年3月

広瀬町教育委員会
教育長 村上晴夫



例　　言

1. 本書は、平成2年度に策定された史跡富田城跡総合整備計画を受け、広瀬町教育委員会が平成5年度から実施している史跡等活用特別県単事業「ふるさと歴史の広場」及び史跡整備事業に伴う史跡富田城跡環境整備事業報告書である。
2. 本事業は、文化庁、島根県教育委員会、史跡富田城跡総合整備委員会の指導を得て広瀬町教育委員会が実施した。
3. 史跡富田城跡総合整備委員会及び事務局は次の通りである。

【史跡富田城跡総合整備委員会】

藤岡 大拙	島根県立女子短期大学学長
井上 寛司	大阪工業大学教授
河瀬 正利	広島大学教授
小野 正敏	国立歴史民俗博物館助教授
五味 盛重	建造物保存技術協会参事
山根 正明	松江南高等学校教諭
宇山 辰夫	広瀬町助役
村上 晴夫	広瀬町教育長
积臣 正見	広瀬町文化財専門委員
足立 武夫	広瀬町文化財専門委員
山崎 享二	出雲尼子を興す会会长
松崎美弥子	出雲尼子を興す会副会長
金子 義明	広瀬町立歴史民俗資料館嘱託員

【指導・助言】

文化庁・島根県教育庁文化財課

【事務局】

教育長	村上 晴夫
教育次長	楫野 光範（～平成11年12月） 加納 弘（平成12年4月～）
補佐兼文化係長	山根 明紀（平成10年4月～平成11年3月）
補佐兼文化財係長	古山 亮二（平成11年4月～平成13年3月）
主査兼文化財係長	足立 修（平成13年4月～平成14年3月）
次長補佐兼文化財係長	山本由弥子（平成14年4月～）
文化係主任	内田 雅巳（発掘調査担当。～平成11年3月、）
文化財係主任	石原 秀樹（平成10年4月～平成14年3月）
文化財係主任主事	舟木 聰（発掘調査担当。平成10年10月～）

【調査補助員】 金子義明、阿部賢治（～平成10年4月）

【整理作業参加者】 吉田 博、今岡利江、山本千草（以上臨時職員）、松林 潤（四國学院大学学生）

【発掘作業員】 岩田博道、近藤幸吉、仙田茂道、祖田 亮、山岡幸雄、蒲生 盛、松坂唯男、松坂トモ子、金子良子、山根広志、岩田 隆、坂田真一、石田朝子

4. 発掘・整備並びに報告書作成にあたっては、以下の方々から有益な御指導・御助言・御協力をいただいた。記して謝意を表します。(順不同、敬称略)
西尾克己、守岡正司、東森 晋（以上、島根県埋蔵文化財調査センター）、細田美樹（島根大学大学院生）、いなか舍
5. 本書に掲載した第2図は国土交通省国土地理院のものを、他の宮田城跡に関する地形測量図は株式会社ワールドに委託・作成したものを使用した。
6. 遺構に用いた略記号の内容は以下の通りである。
S B（建物跡）、S K（土壙）
7. 本書に使用した実測図は以下の者が作成した。
(遺構実測) 内田、舟木、石原秀樹、金子
(遺物実測) 舟木、吉田、細田、今岡、松林
(浮書) 山本千草
8. 本書に使用した発掘調査及び出土遺物の写真は以下の者が撮影した。
(遺構写真) 舟木
(遺物写真) 舟木、今岡
9. 整備の設計及び管理は、株式会社文化財保存計画協会に委託して行った。
10. 本書の編集は主に舟木が行い、第VI章、VII章については株式会社文化財保存計画協会に執筆を委託した。
11. 出土遺物及び本書に掲載した遺構・遺物の実測図及び写真は広瀬町教育委員会で保管している。
12. 本書で使用した陶磁器類の年代観は以下の論文を参考にした。
(染付) 小野正敏1982「15・16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究No.2』
(青磁) 上田秀夫1982「14~16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究No.2』
(白磁) 森田 勉1982「14~16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究No.2』
(備前系陶器) 間壁忠彦1991「備前焼」(考古学ライブリー60) ニューサイエンス社

本文目次

序 文

例 言

目 次

第Ⅰ章 整備事業の経緯	1
第Ⅱ章 歴史的環境	2
第1節 富田城跡周辺の城館遺跡	2
第2節 富田城の歴史的背景	5
第Ⅲ章 発掘調査	7
第1節 三ノ丸地区	7
1. 第1トレンチ	7
2. 第2トレンチ	7
3. 第3トレンチ	7
4. 第14トレンチ	7
5. 带曲輪遺構	7
6. 第13トレンチ	9
7. 第15トレンチ	9
8. 第16トレンチ	12
第2節 本丸地区	13
1. 平成8年度調査区	13
2. 第1トレンチ	13
3. 第2トレンチ	13
4. 第3トレンチ	13
5. 第4トレンチ	13
6. 第5トレンチ	14
第3節 山中御殿平・花ノ壇地区	20
1. 加工段1	20
2. 加工段2	20
3. SK01	20

4. S D 0 2 · 0 3	20
5. 伝・多聞櫓石垣北側根石部分	20
第IV章 出土遺物	25
第1節 三ノ丸地区	25
第2節 本丸地区	41
第V章 まとめ	57
第1節 三ノ丸地区	57
第2節 本丸地区	58
第3節 山中御殿平・花ノ塙地区	58
第4節 富田城跡出土の軒丸瓦・軒平瓦の型式分類	58
写真図版	
第VI章 環境整備事業方針と範囲	105
第1節 整備方針と目的	105
第2節 平成9~14年度環境整備工事範囲	111
第VII章 環境整備工事	113
第1節 三ノ丸地区	113
第2節 本丸地区	121
第3節 山中御殿平・花ノ塙地区	125
第4節 その他	133

挿 図 目 次

第1図 発掘調査箇所	1
第2図 周辺の城館遺跡	3
第3図 三ノ丸地区トレーンチ配置図	8
第4図 带曲輪遺構付近実測図	10
第5図 带曲輪遺構・土層断面図	11
第6図 本丸地区遺構実測図	15~16
第7図 第2トレーンチ遺構実測図	17
第8図 第2トレーンチ石垣実測図	18
第9図 第5トレーンチ遺構実測図	19

第10図	山中御殿平・花ノ壇地区遺構実測図	21
第11図	山中御殿平・花ノ壇地区土層断面図	22
第12図	多間櫓石垣根石実測図	23
第13図	三ノ丸地区第1トレンチ出土遺物実測図（1）	25
第14図	三ノ丸地区第1トレンチ出土遺物実測図（2）	26
第15図	三ノ丸地区第1トレンチ出土遺物実測図（3）	27
第16図	三ノ丸地区第1トレンチ出土遺物実測図（4）	28
第17図	三ノ丸地区第1トレンチ出土遺物実測図（5）	29
第18図	三ノ丸地区第2トレンチ出土遺物実測図（1）	31
第19図	三ノ丸地区第2トレンチ出土遺物実測図（2）	32
第20図	三ノ丸地区第2トレンチ出土遺物実測図（3）	33
第21図	三ノ丸地区第14トレンチ出土遺物実測図	35
第22図	三ノ丸地区SB01出土遺物実測図（1）	36
第23図	三ノ丸地区SB01出土遺物実測図（2）	37
第24図	三ノ丸地区SB01出土遺物実測図（3）	38
第25図	三ノ丸地区SB01出土遺物実測図（4）	39
第26図	三ノ丸地区帶曲輪出土遺物実測図（1）	40
第27図	三ノ丸地区帶曲輪出土遺物実測図（2）	41
第28図	三ノ丸地区帶曲輪石垣前面出土遺物実測図（1）	42
第29図	三ノ丸地区帶曲輪第2遺構前面出土遺物実測図（2）	43
第30図	三ノ丸地区第13トレンチ出土遺物実測図	44
第31図	三ノ丸地区南斜面一括出土遺物実測図（1）	45
第32図	三ノ丸地区南斜面一括出土遺物実測図（2）	46
第33図	三ノ丸地区南斜面一括出土遺物実測図（3）	47
第34図	三ノ丸地区南斜面一括出土遺物実測図（4）	48
第35図	三ノ丸地区南斜面一括出土遺物実測図（5）	49
第36図	本丸地区出土遺物実測図（1）	50
第37図	本丸地区出土遺物実測図（2）	51
第38図	本丸地区出土遺物実測図（3）	52
第39図	本丸地区出土遺物実測図（4）	53
第40図	軒丸瓦分類図	61
第41図	軒平瓦分類図	62

第42図 短期整備範囲	106
第43図 平成9~14年度環境整備範囲	112
第44図 遺構検討結果（1）	114
第45図 遺構検討結果（2）	115
第46図 三ノ丸南側斜面整備概要－1	117
第47図 三ノ丸南側斜面整備概要－2	118
第48図 三ノ丸南側斜面整備概要－3	119
第49図 三ノ丸から本丸方向へのルート想定図	123~124
第50図 整備予定箇所	126
第51図 遺構検出状況	127
第52図 平成9・10年度整備箇所	128
第53図 整備箇所縦断図	129
第54図 整備箇所横断図	130
第55図 平成13年度整備箇所	134
第56図 花ノ塙便益施設	135
第57図 石垣解体・復旧展開図	138
第58図 標準断面図	138

表 目 次

表1 周辺の中世城館遺跡一覧	4
表2 三ノ丸地区土器・陶磁器観察表	54
表3 三ノ丸地区軒瓦観察表	55
表4 三ノ丸地区丸瓦平瓦他観察表	55
表5 三ノ丸地区石製品土製品観察表	55
表6 三ノ丸地区金属製品観察表	56
表7 本丸地区上器陶磁器観察表	56
表8 本丸地区軒瓦観察表	56
表9 本丸地区丸瓦観察表	56
表10 本丸地区石製品土製品観察表	56
表11 事業工程	111

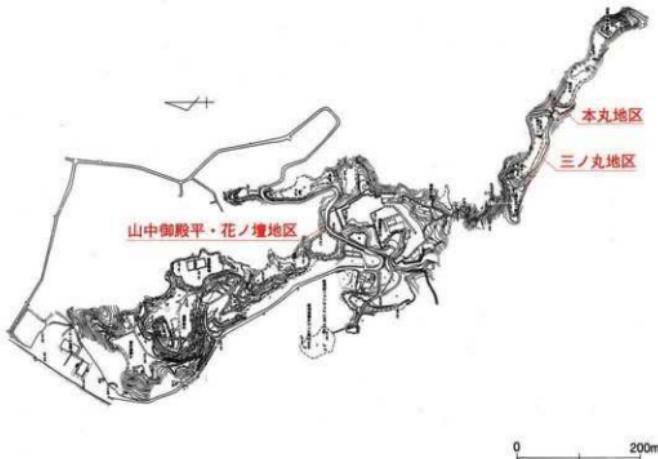
第Ⅰ章 整備事業の経緯

史跡富田城跡は昭和9年に国の史跡指定を受け、その後千畳平・太鼓壇付近及び山頂部については公園整備が行われてきた。

しかし城跡の遺構についての調査研究活動は、昭和52年から始まった史跡整備に伴う山中御殿平地区の発掘調査が行われるまでは、少数の地元郷土史家の研究活動を除き、ほとんど行われていなかった。

城跡は廃城以後長年の風雪にさらされ、加えて樹木の繁茂による崩壊が進んでおり、さらに地域住民を中心として城跡の整備・公開の要望が高まつたことから、広瀬町では平成2年度に史跡富田城跡総合整備計画を策定し、それを踏まえて平成5年度より史跡等活用特別整備事業「ふるさと歴史の広場」の指定を受けて、史跡富田城跡の調査・整備を進めいくこととなった。当初の方針としては城跡内の通路及び虎口遺構を発掘調査によって検出し、往時の登城ルートを復元することで見学路として整備を行うことを目的とした。

今回の報告では、平成10年度から平成13年度に実施した三ノ丸地区・本丸地区・花ノ壇地区的発掘調査成果と山中御殿平地区・花ノ壇地区・三ノ丸地区・二ノ丸地区・本丸地区的整備状況についてまとめることとする。



第1図 発掘調査箇所 (S=1/8000)

第Ⅱ章 歴史的環境

第1節 富田城跡周辺の城館遺跡

富田城跡の所在する広瀬町には中世期の城館遺跡が多数存在しており、島根県内でも有数の密集地帯である。

遺跡の多くは山上に位置する山城跡であり、遺構の依存状態は良好であるが、山麓部に所在する遺跡は後世の開墾や宅地造成等により、損壊もしくは消滅しているものもある。

大部分は現在の広瀬の町の周辺に集中しており、富田城に関連した城館跡と考えられる。

代表的な遺跡としては、富田城跡の所在する月山の北東新宮谷一帯に尼子国久・誠久親子が率いる新宮党の居館跡を中心とした新宮谷城館跡群、そして南西の塩谷一帯には明星寺館跡を中心とした明星寺・塩谷城館跡群が存在する。

月山北部山麓を流れる飯梨川（富田川）の河床には城下町遺跡である富田川河床遺跡がある。寛文6年（1666）の人洪水によって水没し、以後幻の城下町と呼ばれてきたが、昭和40年代に上流にダムが建設されて以来、徐々に遺構が露出するようになった。発掘調査は昭和49年の第一次調査を皮切りに数次に渡り行われた結果、大量の遺構・遺物が発見され、中～近世を代表する遺跡として知られるようになった。

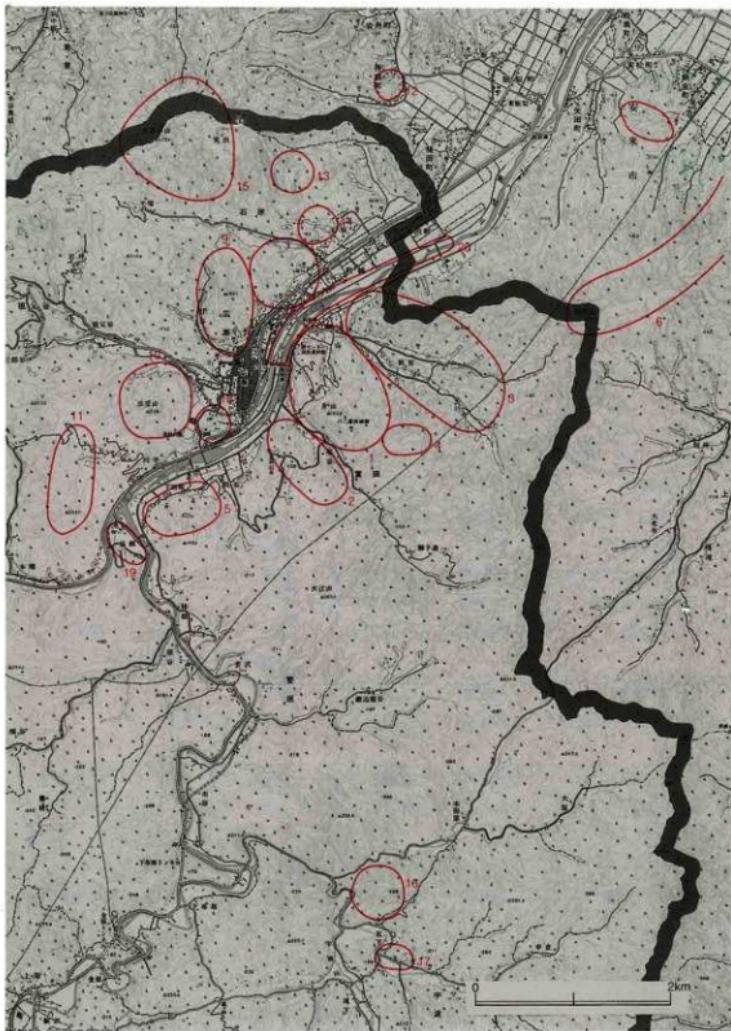
その他著名なものとしては、京羅木山城砦跡群、勝山（瀧山）城跡等がある。京羅木山城砦跡群は天文12年（1543）山口の大内義隆が富田城を攻めた際本陣が置かれたと伝わる所で、山頂部から尾根伝いに曲輪が連続している。特に東方尾根筋には舟形虎口と連続堅堀で防御を固めている。

勝山城跡は京羅木山城砦跡群の南東端に位置し、富田城攻めの際の毛利軍の本陣の城砦であると考えられる。特徴的なのは地元で「堀溝」と呼ばれる連続堅堀群と、「人橋」と呼ばれる中世では県下最大規模の舟形虎口の存在である。

これらの遺跡の内、富田城跡と富田川河床遺跡以外で発掘調査が行われたものは少ない。

日向丸城跡は富田城跡南東の谷を挟んだ丘陵上に所在する。山頂から尾根伝いに伝・尼子晴久墓のある地点まで曲輪が連続しており、富田城本体と連携して背後を防衛するための城砦と考えられる。平成11年度に林道建設に伴い一部の曲輪について発掘調査が行われ、堀切状遺構を検出した他、尾根筋を削平して平坦面を造り、それによって出た土砂で平坦部先端を埋め立てることで曲輪の面積を確保していることが確認されている。出土遺物は皆無であった。

福頼城跡は伝承では福頼氏の居城と言い伝えられている城跡で、舌状丘陵先端に階段状に曲輪を配置し、背後を土塁と深い堀切で遮断している。福頼団地造成に伴い昭和62年に発掘調査が行われ、建物跡と考えられる柱穴群とともに備前系陶器甕や青磁碗、白磁小杯、土器擂鉢、土鍋等が出土している。陶磁器類はいずれも15世紀初頭頃に限定されることから、比較的時期の古い城館跡として注目される。



第2図 周辺の城館遺跡

表1 周辺の中世城館遺跡一覧

名 称	種 别	所 在 地	概 要	備 考
1 富田城跡	城館跡	広瀬町富田	曲輪、帯曲輪、土塁、石垣、堀切、虎口、陶磁器、瓦	国史跡
2 明星寺・塙谷城館跡群	城館跡	広瀬町富田	曲輪、土塁、堀切	
3 新宮谷城館跡群	城館跡	広瀬町富田	曲輪、堀切、陶磁器他	県史跡新宮 党館跡含む。
4 日向丸城跡	城館跡	広瀬町富田	曲輪、堀切	H11年・部 発掘調査。
5 寺山城跡	城館跡	広瀬町菅原	曲輪、堅堀	蓮花寺山城
6 独松山城砦群	城館跡	広瀬町富田	曲輪、土塁、堀切、堅堀	
7 鮫生山城跡	城館跡	安来市鮫生町	曲輪、堅堀	
8 亀井ヶ成、誓願寺裏城砦跡群	城館跡	広瀬町広瀬、石原	曲輪、土塁、井戸	
9 大成山城砦跡群	城館跡	広瀬町広瀬	曲輪、土塁	
10 三等山城跡	城館跡	広瀬町広瀬	曲輪、堀切	
11 経塚山城砦跡群	城館跡	広瀬町広瀬	曲輪	
12 神庭横山城跡	城館跡	安来市神庭町	曲輪	
13 勝山城跡	城館跡	広瀬町石原	曲輪、土塁、堀切、連続堅堀、桥形虎口	瀧山城
14 石原城跡	城館跡	広瀬町石原	曲輪	
15 京羅木山城砦跡群	城館跡	広瀬町石原	曲輪、連続堅堀、虎口、土塁、堀切	
16 高小屋城跡	城館跡	広瀬町宇波	曲輪、堀切	宁波城?
17 土居城跡	城館跡	広瀬町宇波	曲輪、陶磁器	削平等によ り一部損壊。 宁波城?
18 勝日山城跡	城館跡	広瀬町広瀬	曲輪、土塁、堀切、井戸	八幡山城、 削平等によ り造構一部 損壊。
19 福頼城跡	城館跡	広瀬町下山佐	曲輪、土塁、堀切、柱穴、陶磁器他	消滅 S62年発掘 調査
20 富田川河床遺跡	集落跡	広瀬町富田～安来市古川町	城下町遺構、風呂遺構、陶磁器他	

第2節 富田城の歴史的背景

富田城の築城は平安時代末期の平景清によるとか鎌倉時代初期の守護佐々木義清によるなど諸説ある。しかし築城に関する確かな史料は無く築城年代は明らかではない。

鎌倉時代中期の佐々木泰清の時に出雲西部の塙治郷に守護所がおかれて、その子頼泰が塙治氏を称して守護職を継承し、弟の義泰が富田庄を得て富田氏と称した。⁽¹⁾

暦応4年（1341）室町幕府内の対立で頼泰の孫塙治高貞が討伐され、康永2年（1343）京極高氏（佐々木道誉）が出雲守護職となり文和3年（1354）には富田庄を領有する。しかし南朝方の山名氏の介入もあり、京極氏が富田庄を掌握するのは明徳2年（1391）いわゆる「明徳の乱」で山名氏が没落した以降である。⁽²⁾

京極氏の守護代として尼子持久が近江より下向したとされているが、正確な時期は不明であり、持久自身に関する史料もほとんどない。⁽³⁾

出雲国における尼子氏の動向が確認できるのは尼子清貞からであり、「応仁の乱」に関連した伯耆山名氏との戦いや、出雲国内の土一揆・国一揆に対処したことに関する尼子刑部少輔（清貞）宛の史料がある。これらの戦功により清貞は能義郡奉行職、美保関代官職等、出雲東部への影響力や港湾の支配、船舶への課税の利権を獲得し、出雲国における権力基盤を形成していく。

高貞の死後、守護所がどこに置かれたかは不明であるが、応仁～文明年間（1467～1487）頃までは富田庄に守護所が置かれていたようである。

富田城の存在を示す史料としては文明8年（1476）5月14日、同年5月17日の京極政高感状に「当城」、「富田要害」とある。また年未詳ではあるが5月12日付の政高書状には「当城大木戸役事」とあり、大木戸（城門）の存在も確認できる。

清貞の子である尼子経久については、清貞関係史料の最終年紀が文明8年であること、経久の宛名が又四郎から民部少輔に変わった文明11年（1479）の史料から推測してこの頃に家督を繼承したと考えられる。

経久は文明16年（1484）に寺社本所領の横領や御所修理料段銭の緩急を理由に室町幕府によって追放される。その後の経緯は明らかではないが、文亀～永正年間頃から史料に再びその名が見られることから、この頃には復職しているようである。⁽⁴⁾

経久関連の史料は杵築（出雲）大社、鰐淵寺、口御崎神社、岩屋寺等の関係資料から考察して、領国の安定をはかるために寺社政策を重要視していたことがわかる。

経久の孫である晴久（詮久）は天文年間初頭に経久の三男尼子（塙治）興久との内紛、天文9年（1540）安芸の毛利氏への出兵、天文12年（1543）の大内氏の来攻⁽⁵⁾等を経て天文21年（1552）年には室町幕府より八カ国の守護職に補任される。⁽⁶⁾

また天文23年（1554）には経久の次男尼子国久率いる新宮党を討滅して軍事力を削弱させたとされている。この事件に関する確かな史料はないが、この頃の晴久は家臣團を従米の一族衆や国人衆主体から直臣である富田衆主体へと改革していることが各史料から推測できることから、新宮党の討滅がこのような支配体制確立のためのプロセスの一つであったと考えられる。なお、新宮谷の太夫成（伝・新宮党館跡）の発掘調査では16世紀中葉以前の遺物が出土しており注目される。⁽⁷⁾

晴久の死後、永禄5年（1562）大内氏の旧領を手中に収めて勢力を拡大しつつある安芸

の毛利氏が出雲侵攻を開始したことより次第に尼子氏の出雲国人衆への支配能力は弱まり、ついに永禄9年（1566）11月富田城は開城され、晴久の子で時の当主である義久は安芸国に23年間幽閉された。⁽⁵⁾

その後尼子勝久・中山幸盛（鹿介）を中心とする旧領回復のための軍事行動が天正6年（1578）まで続いたが⁽⁶⁾、失敗に終わり、出雲尼子氏はついに終焉を迎えたのである。

毛利氏の支配下に置かれた富田城は、毛利元秋、元康と受け継がれた。

その後天正19年（1591）に吉川広家が入城する。⁽⁷⁾城内にある巖倉守には天正20年（1592）2月二宮兵介長正（吉川家家臣）銘の鏽鉄製釣灯籠が所蔵されている。

慶長5年（1600）関ヶ原の役の後、代わって遠州浜松より転封してきた堀尾吉晴が慶長16年（1611）に松江に築城したことでの富田城は政治的機能を失い、元和元年（1615）徳川幕府による一國一城令の公布により廃城されたと考えられる。^{(8) (9)}

- (1)『絵群書類從』 佐々木氏系図
- (2)『戦国大名尼子氏の伝えた古文書 佐々木文書』島根県古代文化センター
文書番号 8・24・62・66・67
- (3)『大社町史史料編』文書番号706 日御崎神社文書「永亨11年（1439）11月一神旨上書」に正長元年（1428）10月17日并当年正月6日の事として尼子四郎左衛門尉の名があるが、持久との関係は不明。
- (4)『佐々木文書』127~201、222、223
『大日本古文書』吉川家文書317
『新修島根県史』雲樹寺文書等
- (5)『大日本古文書』吉川家文書1481、天文11年10月6日付の史料に、晴久が山佐村（現・広瀬町山佐）地下人の忠義を賞美すると共に本年の税を免除し、今後2年間の税の半分を免除するよう森路山城守家貢に命じたとあり、この合戦に関わる記述かもしれない。
- (6)『萩瀬閻聞録』巻16志道69、巻109三戸1他
『大社町史史料編』1154鶴渕寺文書
『佐々木文書』225~231
- (7)『史跡富田城開発遺跡群発掘調査報告書』島根県教育委員会 昭和58年3月
- (8)『萩瀬閻聞録』巻81見 k19、巻102治泉15・16他
『広島大学文学部紀要49』内藤文書（内藤家之次第覚書）
- (9)『大日本古文書』吉川家文書1466他
- (10)『出雲意宇六社文書』秋上家文書469
- (11)『出雲私史』文久2年
- (12)昭和55・56年度に行われた山中御殿平地区の調査において、方形石組造構内から肥前系陶器（1610年頃開窯と伝わるモノ瀬高麗窯製の鉄絵大皿）が出土している事からも推測される。

第Ⅲ章 発掘調査

第1節 三ノ丸地区

三ノ丸地区では西ノ袖平から二ノ丸虎口遺構に至るルートの解明を目的とし、塩谷に面した斜面部についてトレントによる発掘調査を行った。

1. 第1トレント

西袖ヶ平曲輪が三ノ丸に接する場所であり、平成8年度に整備が行われた三ノ丸石垣南面に隣接する地点にL字型に設定したトレントである。

以前の調査で検出した三段目の石垣の続きを確認したが、南へ約3m程の所で途切れおり、そこから先は岩盤がむき出しになっていた。トレントの北側上端付近では石垣をもう一箇所確認している。石垣根石は確認していないが、平成8年度に確認された三段に渡る三ノ丸北西石垣の最上部に連結すると考えられる。

下段石垣の根元には西袖ヶ平から続く通路状遺構を検出した。幅約2mを測り、上面からは崩落石材に混じって瓦が多数出土している。

2. 第2トレント

トレント上端付近では石垣を検出したが、通路跡には石垣はない。通幅は約2mを測り、その上には丸瓦・平瓦を主体とする多量の瓦の堆積が確認された。

3. 第3トレント

トレント上部で石垣とそれに伴う通路状遺構を検出した。石垣根石とそれに伴う通路跡は石垣が崩壊する恐れがあり完掘しなかったため全容は不明である。

4. 第14トレント

トレント東端で石垣を検出した。崩落の危険があるため石垣根元は掘り出さなかった。

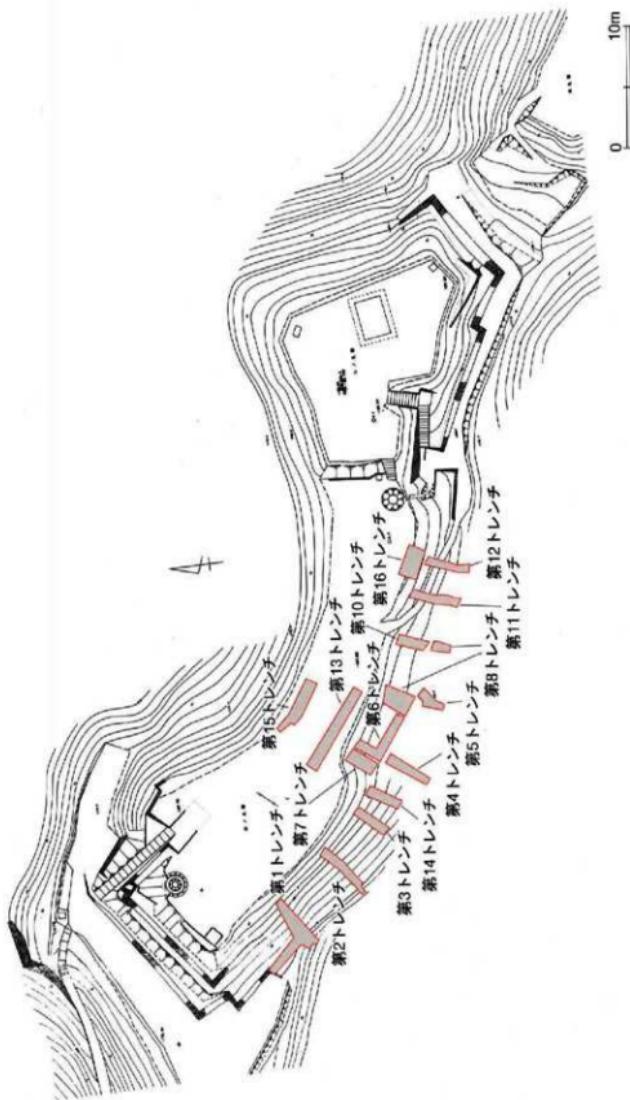
5. 帯曲輪遺構（第4～7及び9～12トレント）

三ノ丸郭南斜面東部で検出した石垣を伴うテラス状の曲輪跡である。調査の結果、この曲輪跡は以前検出された二ノ丸南側虎口西側の石垣土壘状部分に接続していることを確認した。この遺構は長さ約27m、幅約3mを測り、北西端付近は南部にやや傾斜している。平坦面及び背後の斜面には西半部の礎石建物跡（SB01）を始めとして数箇所に礎石を確認したが、SB01以外はそれぞれの繋ぎについて判断することは困難であった。

SB01は柱間の長さ約2mを測る1間×5間の建物跡である。第5トレントで検出した石垣屈曲部分の上部付近で完結している。本遺構面上にはSB01と重なるようにして主軸をやや異にする礎石列も存在することから、建て替えが行われた可能性がある。

帯曲輪遺構北側斜面では岩盤を削ってそこに礎石を据えている箇所が4箇所確認されたがその性格や検出された他の遺構との関連について判断することはできなかった。また、

第3図 三ノ丸地区トレーンチ配置図 (S=1/400)



斜面上部の三ノ丸曲輪縁辺付近からは、岩盤に掘り込まれた柱穴列も検出している。

帶曲輪上及び石垣下部からは16世紀代の物を中心とする多くの遺物が出土しているが、瓦類はほとんど出土していない事から、SB 01は瓦葺き建物ではなかった可能性がある。またSB 01周辺からは鉄釘が多数出土している。

帶曲輪石垣は上端部が崩落しているため正確な高さは不明であるが、現存高で約2.3mを測る。荒く割った大型の石材の間に拳大から人頭大の石材を詰め込んでおり、根石部分は幅約1m程度の通路状の土盛りによって固定している。土盛り上には崩落石材が堆積しており、肥前系陶器皿が出土している。また、第4トレンチ南端では石垣を固定する土盛りにより埋没した幅約1.4mの通路状遺構を検出した。この通路状遺構は斜面の岩盤を直角に削って平坦面を造り、そこに高さ30~60cm程度盛り土を行い、肩部を人頭大の角の丸い石材を並べて土留めしている。

帶曲輪遺構（以下、第I遺構面とする。）の下層における古い遺構面の有無を確認するために、第6・7トレンチと第10トレンチ付近においてサブトレンチによる掘り下げを行った。

その結果、第6トレンチでは斜面の岩盤を削って排水溝を設け、その南部には土を盛り、粗い石積みにより土留めを行った幅約2mの通路状遺構が確認された。遺構面上からは中国製染付碗の破片（小野分類B群）が出土している。

第10トレンチのサブトレンチからは上部遺構面から60cm程度掘ったところで幅約3mの整地面を検出した。この遺構面上には炭が一面に見られ、遺構面及びその埋没土中からは16世紀第3四半期を下限とする遺物が多数出土しているが、第I遺構面で多く出土した糸切底の土師質土器皿が見られず京都系皿のみが見られる事と、瓦が出土しない事が注目される。

第7トレンチのサブトレンチ内では埋没した堀切の一部を確認した。底部を検出していないため堀切の形状・深さは不明である。

6. 第13トレンチ

帶曲輪遺構下層で確認した堀切遺構の規模と方向を確認するために三ノ丸曲輪中央南端に設定したトレンチである。調査の結果、堀切遺構の上場ラインと曲輪上の建物跡の柱穴を検出した。堀切遺構の幅は約4.5mを測る。堀切東壁側の埋土上からは多量の京都系土師質土器皿片が出土している。

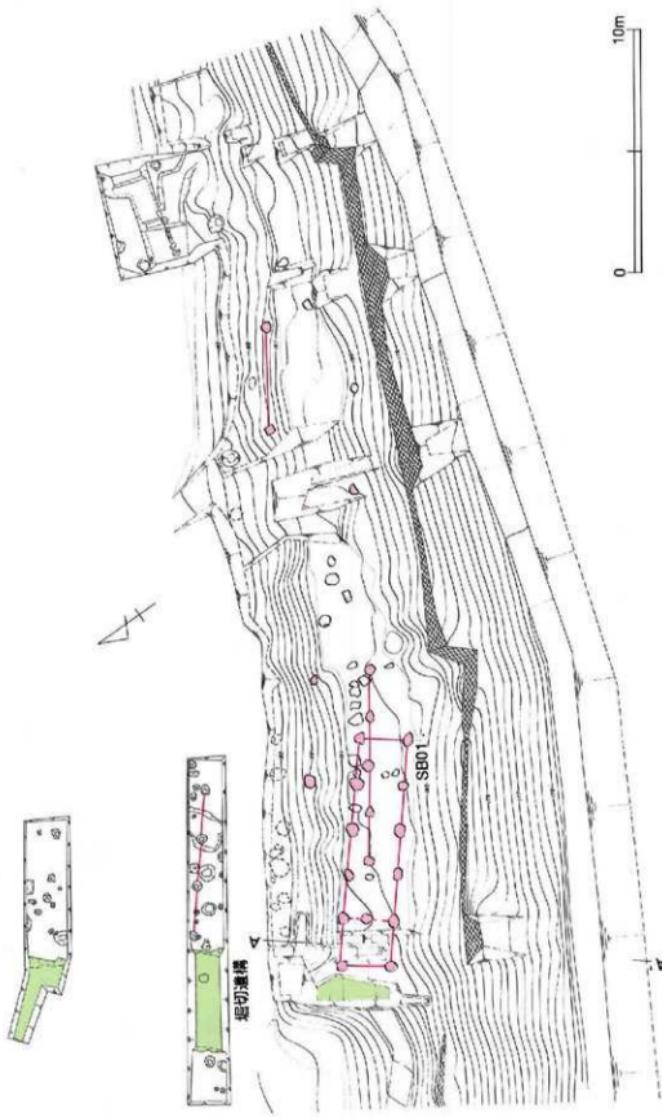
柱穴は大小合わせて24個確認しており、平面形状が円形のものや方形のものがある。幅中には約2m間隔で列を成すものもあるが、調査面積が狭いためその性格は現在の所不明である。

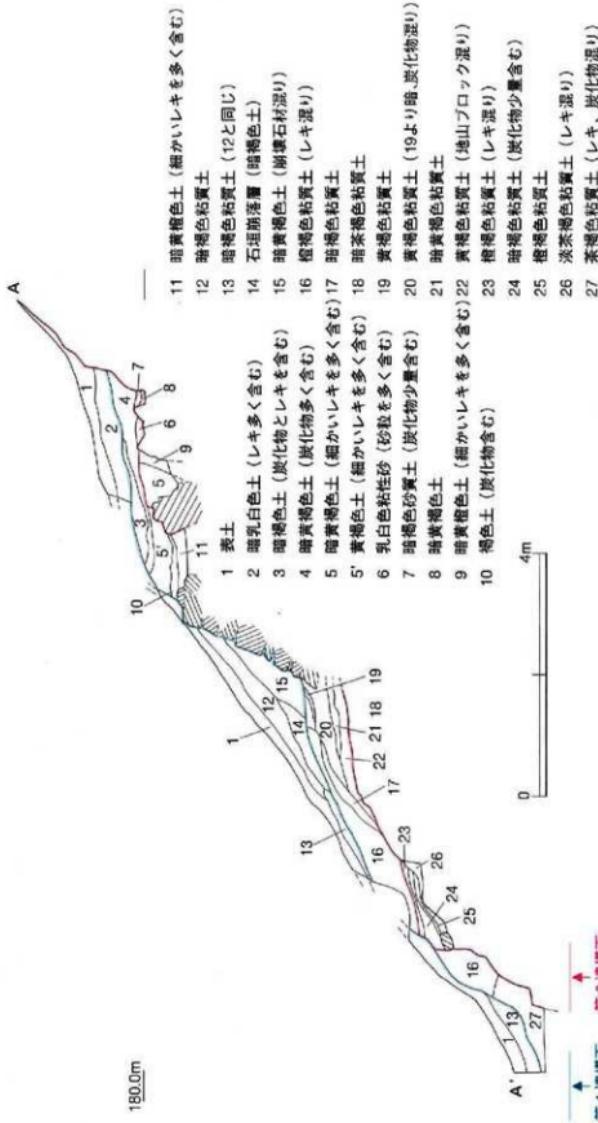
7. 第15トレンチ

第13トレンチ北側に設定したトレンチである。地表面から遺構面まではわずか10cm程度の深さしかない。

第13トレンチで検出した堀切遺構の東岸を本トレンチでも確認した、西岸については大木が繁茂しており確認できなかったが、これにより堀切遺構は三ノ丸中央を横断していることがわかった。堀切遺構東側の平坦面では大小13個の柱穴を確認している。

第4図 帯曲輪遺構付近実測図 ($S=1/200$ 、赤トーン部分は礎石)





第五圖 帯曲輪透構土層断面図 (S=1/80)

8. 第16トレンチ

第13トレンチの東側、三ノ丸の東南端付近に設定したトレンチである。

検出した遺構は溝状遺構2、柱穴7でいずれも岩盤に掘り込まれている。溝状遺構は切り合っており、南側の溝が埋没した後にやや軸を異にして北側の溝が掘られているが、その際南側の溝にぶつかった辺りから、南溝の覆土が流入しないように、岩石を並べて壁をしている。

北側の溝の東側では北側に向かって幅が広がり、方形の溜め枡状となっているが、深さは溝の底部とさほど変わらない。この遺構は調査区外に続くため性格は断定できないが、曲輪内の排水溝と考えられる。

第2節 本丸地区

本丸地区では本丸と二ノ丸の間に存在する堀切から本丸南側に廻る帯曲輪について、トレーナによる調査を行った。加えて平成8年度に調査が行われた堀切部分についても、遺構の関連を把握する目的で再度発掘調査を行い、ラジコンヘリによる写真測量を行った。

1. 平成8年度調査区

平成8年度調査区では、岩盤を加工して造られた通路跡、4つの加工段とそれらに伴う溝状遺構2本、そして橋または建物の柱穴120穴以上を確認した。

加工段1には柱穴が1つも見受けられないが、加工段2・3には多くの柱穴がある。この内加工段2の縁辺沿いにはほぼ一間間隔で一直線に並ぶ5個の柱穴が存在し、橋の跡であると考えられる。

また、加工段2では加工段1の切岸下に沿って造られているY字状プランの溝（溝状遺構1）とそれに平行して走る溝（溝状遺構2）が検出されている。

通路跡は堀切南東壁のほぼ中央から設けられており、堀底道から加工段4及び加工段2を屈曲しながら通過し、調査区北東端にある岩盤掘り残しのスロープを登って本丸へ至るものと推定される。

2. 第1トレーナ

平成8年度調査地の南側に隣接して設定した。遺構面は地表面から約20cmの深さで確認した（第1遺構面）。前回調査部分の壁面を観察したところ、加工段1の縁辺部から先を岩盤面から約1m程度土を盛って整地していることが確認でき、このことから第1遺構面の機能していた時期には加工段1だけはまだ使用されていたと考えられる。この遺構面上には礫石状の扁平な石1個を検出した。

遺構面上及び盛り土内からは備前焼鉢片や土師質土器、青磁の盤などが出土している。

3. 第2トレーナ

第1トレーナから南東へ約2mの所に設定した。第1遺構面の続きを検出したが、このトレーナの北東壁面に石垣を検出した。石垣は検出部分の長さ約1.9m、高さ1mを測り、角の丸い石材と二ノ丸地区の石垣と同一の角ばった石材が使われている。裏込石は無い。石材の間及び石垣内部の土中には瓦片（コビキB）が混ぜ込まれている。

石垣の前面には崩落した石材とともに瓦、鉄釘、中国製青磁等が出土している。

4. 第3トレーナ

第2トレーナから南東へ約9mの位置に設定した。ここでも第1遺構面を検出した。遺構面は幅1.6mを測り、ほぼ平らに土が突き固められている。また北東壁面の岩盤には柱穴1を検出した。遺構面からは上師質土器片の他、中国製染付片が出土している。

5. 第4トレーナ

第2トレーナと第3トレーナのほぼ中間に設定したトレーナである。

第1遺構面上には特に遺構は存在せず、遺構面上から備前焼大甕片や土師質土器の細片が出土したのみである。

第4トレンチでは北西壁沿いに細いサブトレンチを入れて、下層遺構の一部も確認した（第2遺構面）。その結果北東壁沿いに、岩盤に掘り込まれた並行する浅い溝状遺構を2本確認した。

溝状遺構は平成8年度調査区の加工段2で検出した溝状遺構1・2の続きと考えられる。

この遺構面からは李朝系舟徳利の細片が出土している。

6. 第5トレンチ

第3トレンチの南東約3mの地点に設定したトレンチである。

検出した第1遺構面は第3トレンチのものとほぼ水準であり、幅は約75cmを測る。

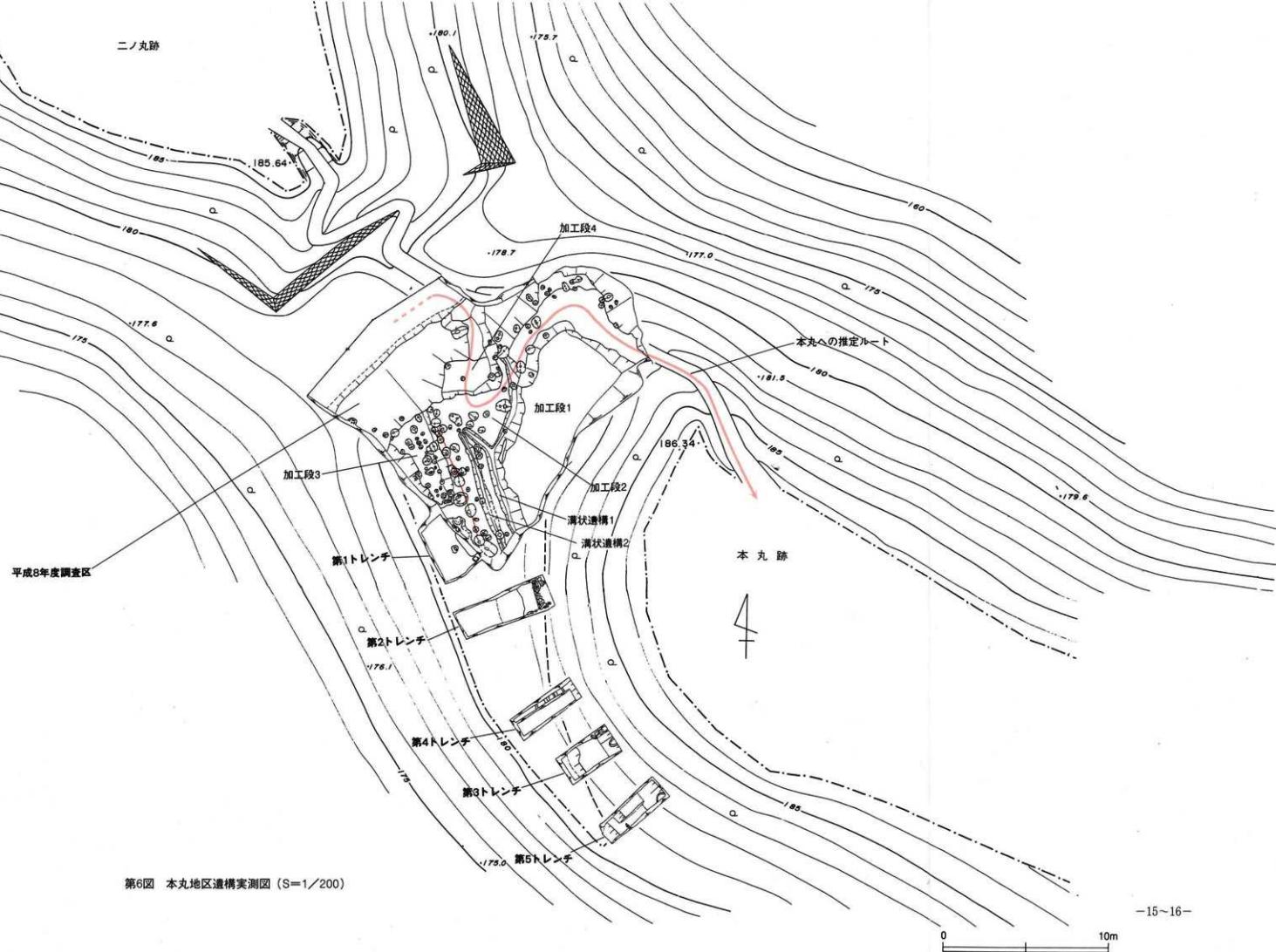
この遺構面上には大量の瓦片（コビキB）が堆積しており、このトレンチの北東斜面上に瓦葺きの塀もしくは建物が存在していた可能性がある。

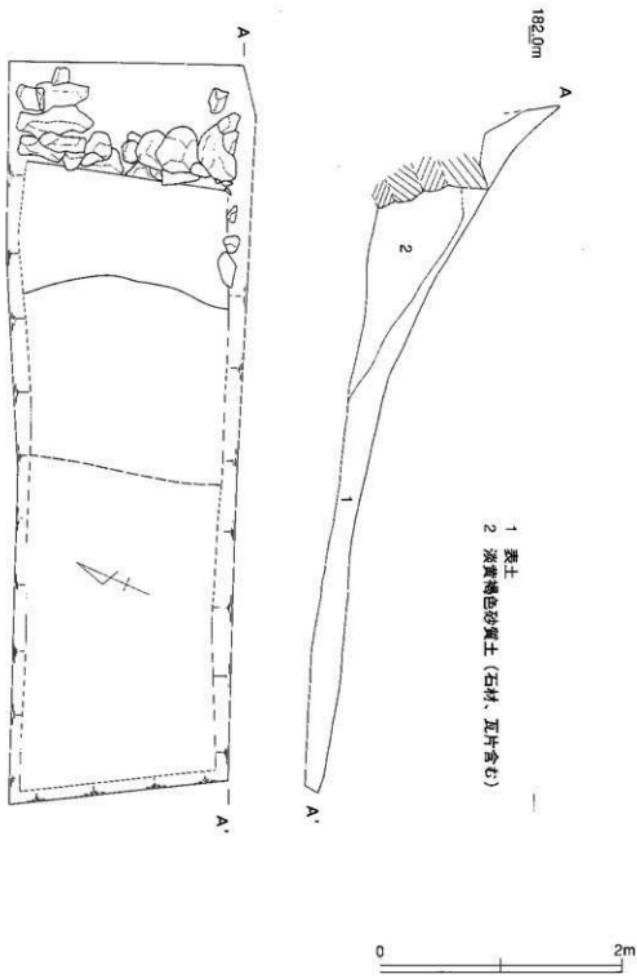
第1遺構面からは糸切底の土師質土器片の他、中国製染付及び白磁片、石鉢片等が出土している。

北東の岩盤面には柱穴1個が掘られている。この柱穴は第1遺構面造成時に埋没しており、第3トレンチで検出した柱穴との柱間は約4.3m離れている。これら2つの柱穴は柵の跡であると考えられる。

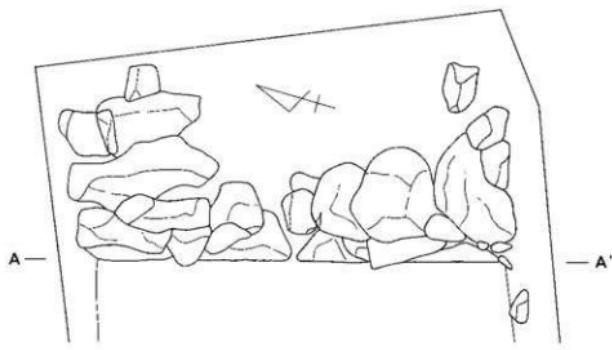
このトレンチでも南東壁沿いにサブトレンチを入れて下層の遺構を確認した結果、第1遺構面から約1.1m下に幅2.2mを測る整地面を確認した（第2遺構面）。

この遺構面上からは備前焼大甕片、中国製白磁及び青磁片、また京都系土師質土器皿片等が出土している。この遺構面では上層の第1遺構面で見られた瓦や糸切底の土器皿が全く出土していない。

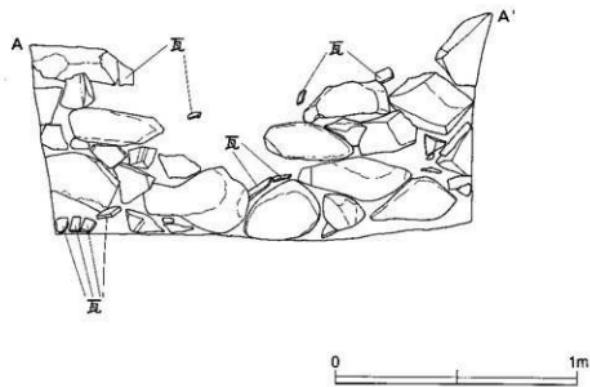




第7図 第2トレンチ遺構実測図 ($S=1/40$)



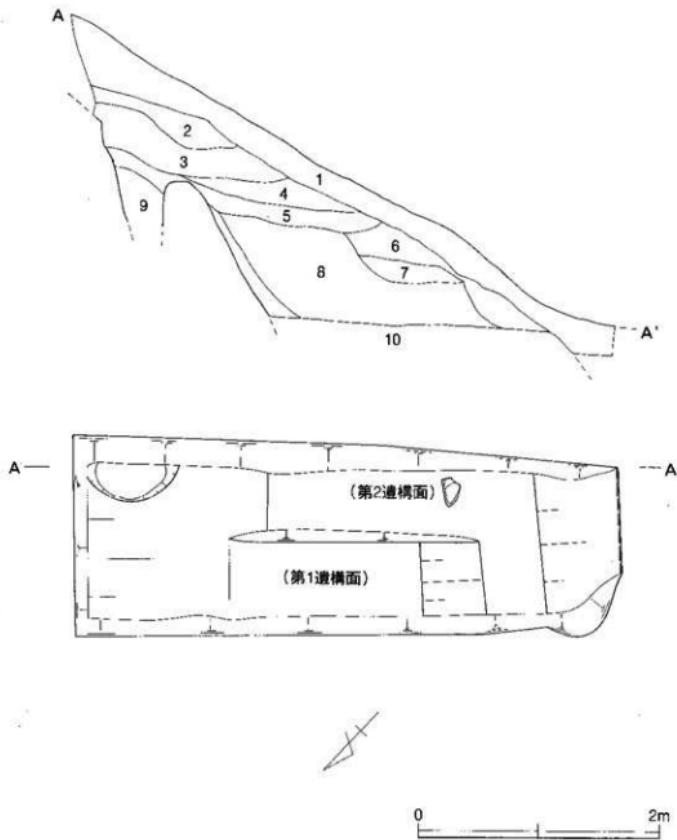
182.0m



第8図 第2トレンチ石垣実測図 ($S=1/20$)

- | | |
|-----------------------|---------------------|
| 1 素土 | 6 暗褐色砂質土 |
| 2 暗褐色砂質土 | 7 橙褐色粘質土（炭化物、砂粒混り） |
| 3 暗褐色砂質土（2よりやや黄色） | 8 暗褐色粘質土（炭化物多、砂粒混り） |
| 4 橙褐色粘質土（砂粒混り）（第1造構面） | 9 暗褐色粘質土（砂粒混り） |
| 5 黄灰褐色粘質土（炭化物微量、砂粒混り） | 10 橙褐色粘質土（第2造構面） |

183.0m



第9図 第5トレンチ造構実測図 ($S=1/40$)

第3節 山中御殿平・花ノ壇地区

山中御殿平地区と花ノ壇地区にまたがる地域、具体的には山中御殿平地区北端のいわゆる多聞櫓跡石垣の北側直下にある平坦地が調査対象である。

遺構の状況を把握するために再掘削を行ったため、平成9年度調査部分と一部重複している部分がある。

調査の結果加工段2箇所、整地面1、柱穴9、溝状遺構3及び石垣構築の際の掘り方プランを検出した。

1. 加工段1

調査区西部中央に位置し、平成9年度調査時に検出された遺構である。東西方向に長さ約16.5m、高さは高いところで約50cmを測る。これは北側に隣接している曲輪の切岸と思われたが、調査区北東部分では段差が無く緩斜面になっていることから、この遺構は石垣構築に伴い尾根が削平された際にできたものではないかと思われる。

2. 加工段2

調査区北側端部で検出した遺構である。

地表面を30~40cm程度削平し、粘土を突き固めて面を造っている。調査以外に続くため全容は不明であるが、實際には壁帶溝である溝状遺構3が掘られており、粘土面には柱穴が1個存在している。この柱穴の東南方向に同規模の柱穴2つが約4mの間隔で並んでおり、樹跡等になる可能性も考えられるが、現時点では断定はできない。

3. S K 0 1

調査区北西で検出した南北約3.4m、東西約6.0m、深さ約50cmを測る不整形の土壙である。

遺構内から遺物が出土しなかったため、遺構の時期、性格は不明である。

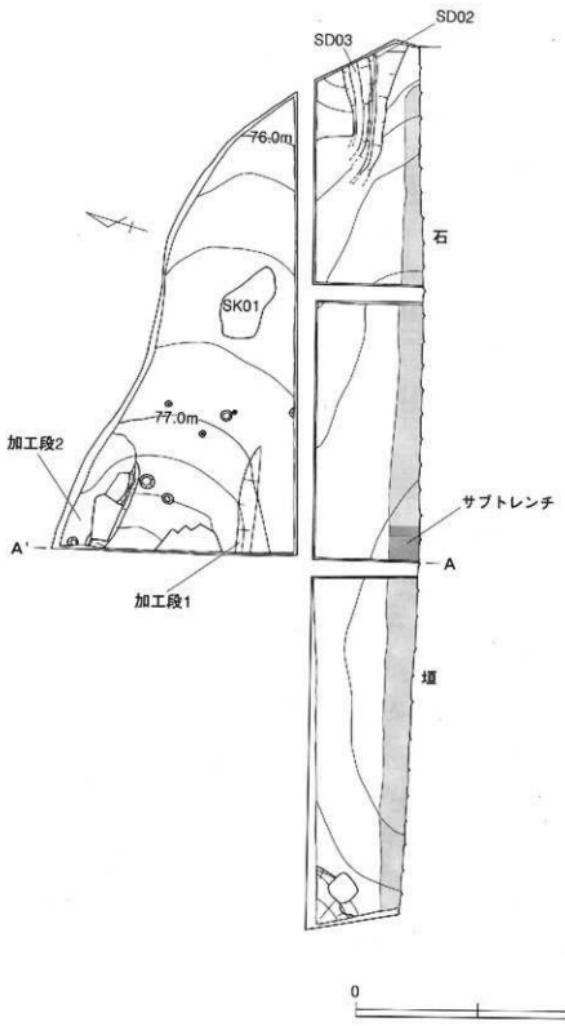
4. S D 0 2・0 3

調査区東端で検出した二条の溝状遺構である。両遺構共に調査地東側の調査区外から登って来ており、端部は北方向にややカーブした後に消滅している。

埋没土は遺構の底部まで耕作土と見られる黒色土を主体とし、崩落した石垣石材や瓦片が大量に混入していた。地元民の話によれば、調査地付近は以前畠地であり、SD 0 2・0 3がある辺りに畠へ登る山道があったという。これらの事情から、耕作の際に出土したこれらの遺物をこの場所に廃棄したものと考えられるが、この溝状遺構が造られた時期について不明である。

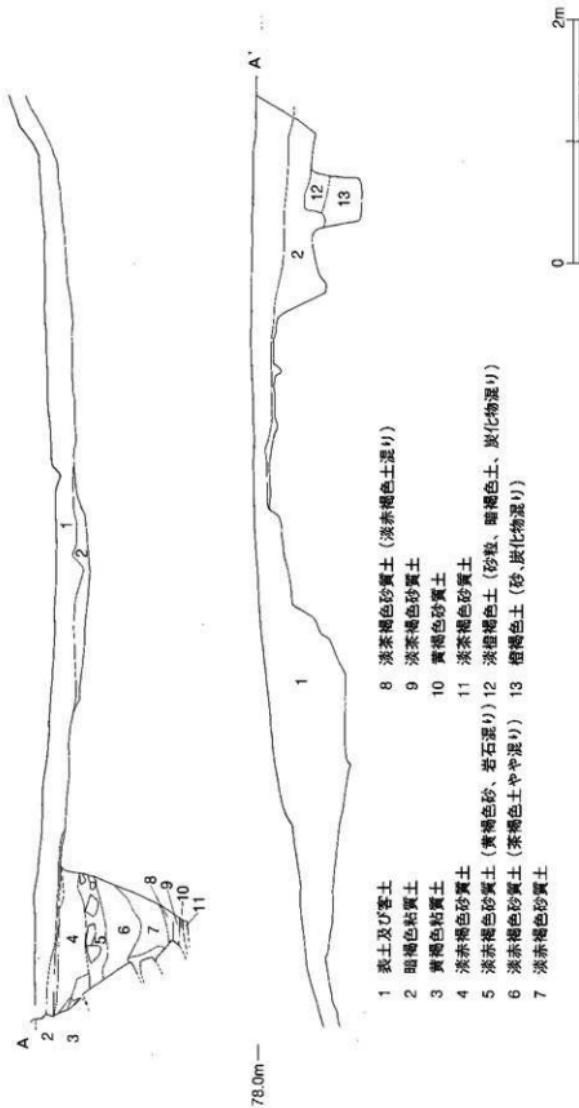
5. 多聞櫓石垣北側根石部分

調査区の南部は山中御殿平の多聞櫓石垣の北面部分に接しているが、調査の結果、石垣に沿って長さ約34m、最大幅約1.2mの土色の異なるプランを確認した。このプランは石垣構築時の掘り方であると判断したため、石垣中央付近に幅約1.6mのサブトレーンチを設

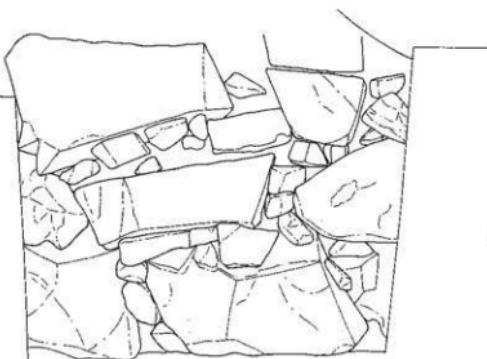
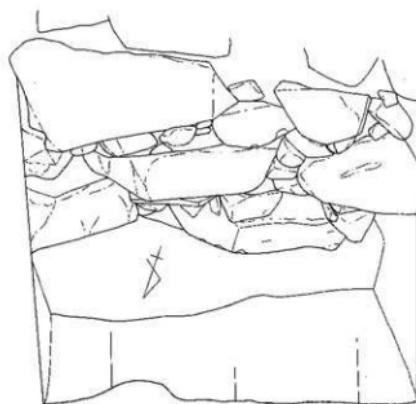


第10図 山中御殿平・花ノ塙地区遺構実測図 (S=1/100)

78.0m—



第11図 山中御殿平・花ノ塙地区土層断面図 (S=1/40)



第12図 多聞椿石垣根石実測図 (S=1/20)

定し、石垣普請の状況を確認することにした。

その結果、造構面から約1.1mの深さで地盤が平坦に整地されており、その面は現在露している石垣東隅角部根石直下の地盤とほぼ水半であることを確認した。

このことから石垣普請の手順としては旧城郭のもの、ないしは新規に造成した切岸の根元を削平した後、その上に90×60cm前後の根石を据え、隙間に人頭大の石材を配し、かつ裏込石を入れながら根石と同程度の大石を積み上げている。石材は荒く削ったものを用いており、矢穴痕は見られない。また根石の下に洞木は確認できなかった。

根石は土を填圧しながら埋め戻した後、掘り方プランを覆い隠すように表面に粘土が貼られていた。

第IV章 出土遺物

第1節 三ノ丸地区

第1トレンチ（第13~17図）

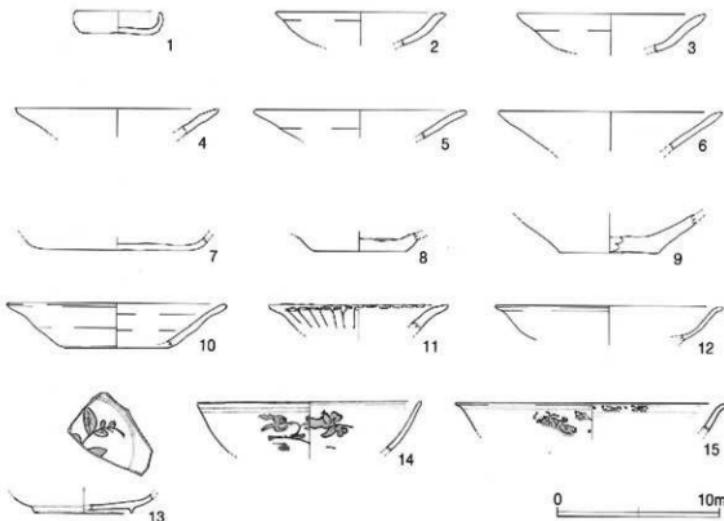
1~10は土師質土器皿である。1は口径5.2cmの小型品で、口縁の一部に煤が付着している。2~7は京都系皿、胎土はよく精製されており口径10cm~14cm程度のものである。8~10はロクロ成形で底部糸切のもの、胎土は砂粒が多い。

11・12は共に16世紀の中国製白磁皿である。11は輪花皿、12は端反皿である。

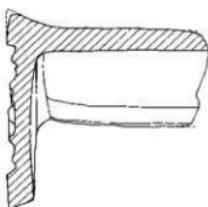
13~15は中国製染付である。13は皿で見込部に草花文を施す。14・15は椀で、14は内外面にそれぞれ2条の界線と草花文を施す。15は外面に草花文と2本の界線、内面に四方櫛文を施す。

16~18は軒丸瓦。16は15個の珠文と左巻きの巴文を配し、丸瓦部内面の調整はコビキBである。17は17個の珠文と左巻きの巴文を配する。18は「巴」字状の文様を配するもので、内面調整はコビキAである。

19~21までは軒平瓦である。19・20は中心飾りは葉脈の簡素な三葉文で、唐草文を左右2箇所ずつ配する。21は中心飾りに小楕と二個の宝珠を配し、唐草文は上下2箇所ずつ枝分かれしている。



第13図 三ノ丸地区第1トレンチ出土遺物実測図(1) (S=1/3)



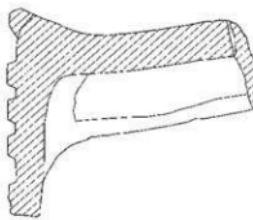
16



17

0 10cm

第14図 三ノ丸地区第1トレンチ出土遺物実測図 (2) (S=1/4)



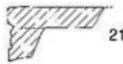
18



19



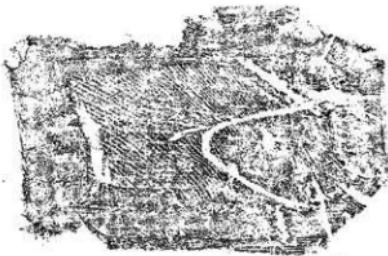
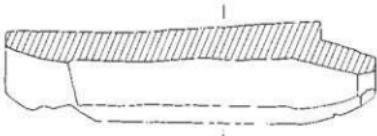
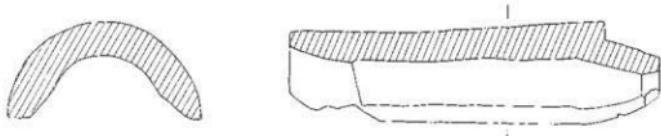
20



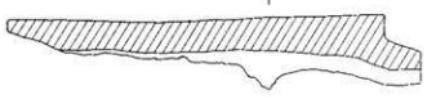
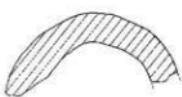
21

0 10cm

第15図 三ノ丸地区第1トレンチ出土遺物実測図（3）（S=1/4）



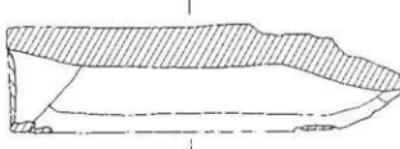
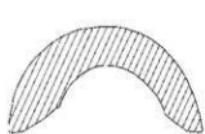
22



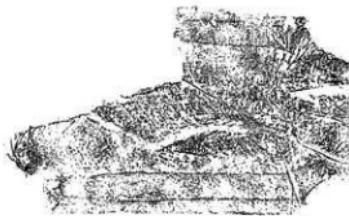
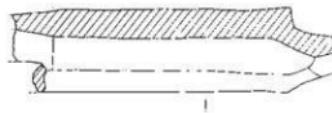
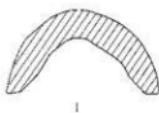
23

A scale bar consisting of a horizontal line with two short tick marks at each end, labeled "10cm".

第16図 三ノ丸地区第1トレンチ出土遺物実測図 (4) (S=1/4)



24



25

0 10cm

第17図 三ノ丸地区第1トレンチ出土遺物実測図(5) (S=1/4)

22~25は丸瓦。22は内面がコビキAで吊り紐の痕跡が見られる。23は内面コビキBである。24はコビキ痕が不明瞭であるが、吊紐とヘラ状工具及び布目痕が見られる。25は内面がコビキAである。

第2トレンチ（第18~20図）

26~33は土師質土器皿。26~29は京都系皿で口径8~12cm程度のものである。30~33は平底で糸切痕が見られる。

34は中国製白磁輪花皿である。35は瀬戸の灰釉人皿である。ロクロ成形で作られており、外面部付近は回転ヘラケズリ調整されている。釉薬は内面及び外面途中までかかっており、見込み部分の釉はヘラ状工具で搔き取られている。

36・37は石製品である。36は凝灰岩質の砥石で、各部に溝状の磨耗が見られ鉄分が付着している。37は来特石製の石臼片で、6本単位の放射状の摺り目が彫られている。

38は軒丸瓦で瓦当面に「巴」字状の文様を配する。39~41は丸瓦。39は内面がコビキAで一部にヘラ状工具の痕跡も見られる。40はコビキB。41は内面コビキAで吊紐痕が見られる。42・43は平瓦で2点とも瓦下面にコビキ痕が見られる。

第14トレンチ（第21図）

44はロクロ成形の土師質土器で糸切底のもの。45は青磁皿である。被熱により全体が荒れている。46は中国製四耳壺の口縁部破片である。

S B 0 1（第22~25図）

47~54は京都系土師質土器皿である。手づくね成形で、一部に指頭圧痕が残るものもある。口径は10~14cm程度のものである。

55・56はロクロ成形の土師質土器皿で糸切底のものである。

57~61は肥前系陶器である。いずれも削り出し高台を持ち、釉薬は内面全体と外面は高台近くまでかけられている。57は皿で、黄緑色の釉薬を施す。58も皿で釉薬は濃緑色である。59~61は碗。59は釉薬は黄緑色で、二度がけしたらしく内外面の釉ダレが顕著である。60は濃緑色の釉がかかり、口縁の一部が欠けたらしく補修されている。61は筒型の碗で、赤茶色の釉薬を施す。

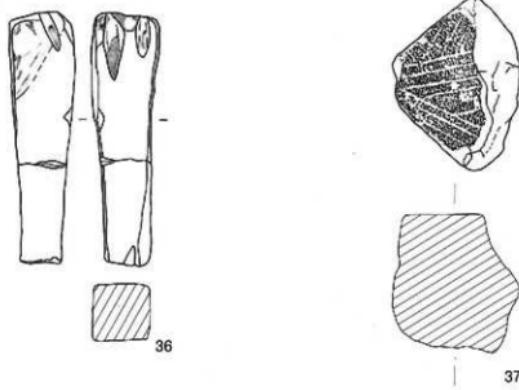
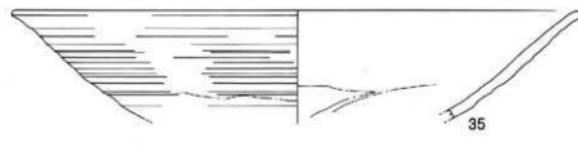
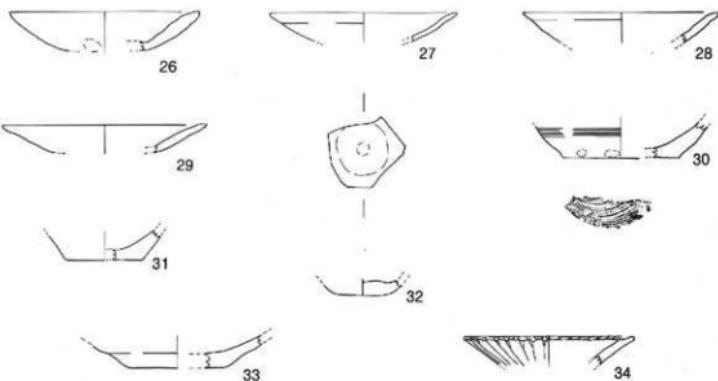
62は越前焼の擂鉢である。口縁の内側に段があり、その下に摺り目を施している。63は瀬戸美濃天日茶碗である。内面から外面腰部にかけて黒褐色の釉がかかる。

64・65は中国製白磁の端反皿である。66~70は中国製染付である。66は皿で模様は界線のみである。67は端反皿、68は内外面に界線と草花文を施す。69は皿で見込に草文を施す。70は碗で、見込に界線と如意雲、外面は草花文、高台内には「福」の字を施す。

71は鉢で内側のみに赤茶色の釉がかかり、見込み部分は釉薬を拭き取っている。外面は回転ヘラ削り調整を施している。72は壺で、暗茶褐色の釉がかかり、外面には沈線、内面には強いナデによる幅広の沈線がある。73~75は瓦。73は丸瓦で外面はヘラ状工具で調整されており、内面にはコビキB痕が見られる。74も丸瓦で内面にはコビキA痕が見られる。75は棟飾瓦と考えられ、丸に食い違いの矢印状文様を施すものと考えられる。

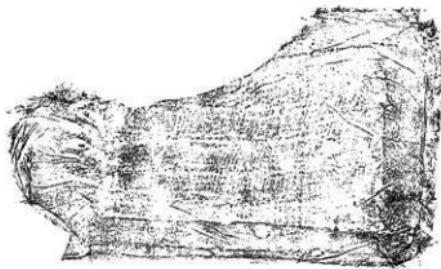
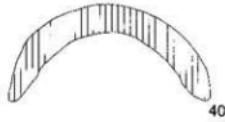
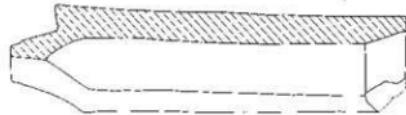
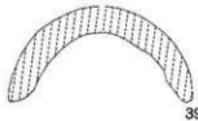
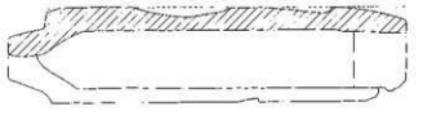
76~81は金属製品。76~79は鉄釘、80は銅錢で上部が欠損しているが、「□半元寶」の文字が見られる。81は銅製小柄の柄である。断面は中空の蒲鉾型で、片面には滑り止めの溝が切ってある。

82は越前国で産出する笏谷石製のバンドコである。外面はよく磨かれているが、内面に



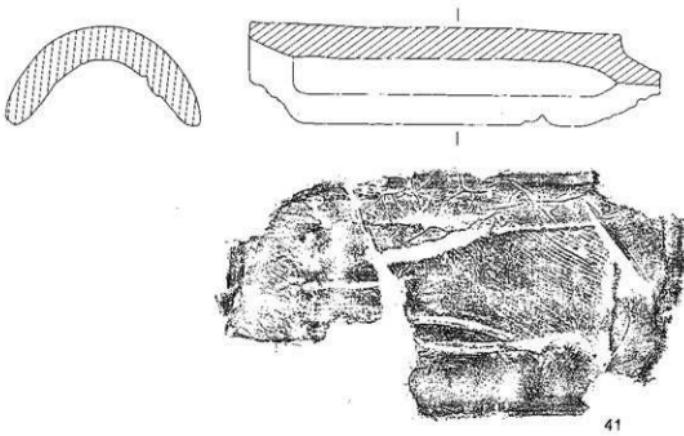
0 10cm

第18図 三ノ丸地区第2トレンチ出土遺物実測図(1) (S=1/3)

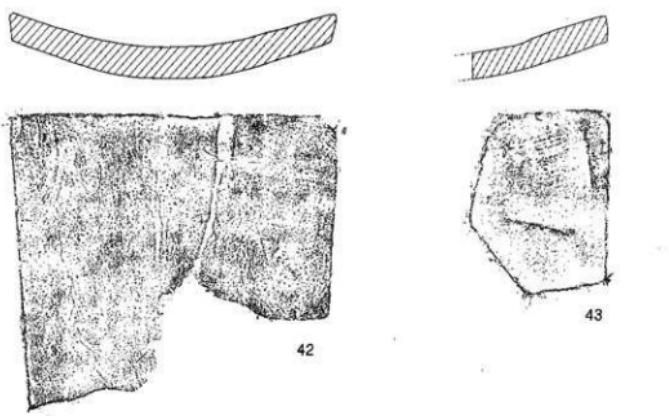


0 10cm

第19図 三ノ丸地区第2トレンチ出土遺物実測図(2) (S=1/4)



41



42



43

0 10cm

第20図 三ノ丸地区第2トレンチ出土遺物実測図(3) (S=1/4)

はノミ痕が顕著である。内面には炭をいれて使用した際に焼けて変色した跡が見られる。
带曲輪遺構出土遺物（第26・27図）

83～93は京都系土師質土器皿である。口径は8～14cm程度のものがある。94～98はロク
口成形の土師質土器皿で糸切底のものである。中には98のように京都系皿のスタイルを意
識したようなものも見られる。

99は備前系陶器壺で、肩部に波状文を施すものである。

100・101は白磁。100は端反の小杯、101は端反皿である。102は青磁の端反皿。103は青
磁の香炉で外面に2条の沈線を施す。

104～109は中国製染付である。104は小杯。105は皿で外面底部付近は無釉、106～109は
碗である。

110はタイ製壺の胴部と考えられるものである。外面には黄褐色の釉が上半にかかる。
111は李朝の舟徳利底部である。タタキ成形で、外面全体に黄褐色の釉がかかる。112は土
師質土器の底部を利用した紡錘車状の土製品である。113は頁岩質の石材で作られた砥石
である。

带曲輪石垣前面出土遺物（第28図）

114～118は第4トレンチ出土。

114は瀬戸美濃の天目茶碗で、暗茶褐色の釉がかかる。115は中国製白磁の端反皿である。
116は青白磁の碗である。外面には線描き蓮弁文を施す。117は陶器壺の底部付近の破片で
ある。118は模飾瓦で、中心の文様は不明であるが、外円部に釘穴が残る。

119～125は第5トレンチ出土。

119～122は土師質土器である。回転ナデ調整で、底部は糸切底のものである。123は中
国製白磁皿で高台付近は無釉である。124は越前焼播鉢で、62と同一個体の可能性がある。

125は中国製染付碗である。外面に波濤文等の文様を施す。

126～128は第8トレンチ出土。

126は軒平瓦で、瓦当面の文様は中央に線状の宝珠文、左右に波形の唐草文を施す。127
は備前系陶器の壺である。内面に放射状の摺目を施す。128は肥前系陶器皿である。器
表面は淡茶褐色を呈し、口縁及び見込みに黒色の釉がかけられている。

带曲輪遺構第2遺構面出土遺物（第29図）

129～139は第2遺構面からの出土遺物である。

129～131は第7トレンチの出土。129は京都系土師質土器皿、130は中国製染付皿である。
131は李朝の舟徳利である。

132～139は第10トレンチ出土。

132・133は京都系土師質土器皿、134は中国製白磁端反皿、135は青磁輪花皿、136は染
付皿である。

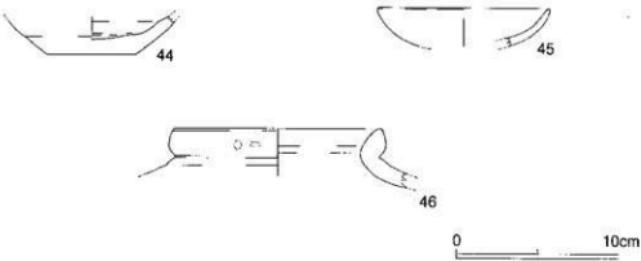
137は底地不明の陶器の蓋である。外面には黒茶色の釉薬がかかる。138は備前系陶器播
鉢で放射状の摺り目を施す。

139は銅製の金具である。形状はコの字状を呈し、断面もコの字状を呈している。

両端にはこの金具を固定するためとみられる穴が開けられている。

第13トレンチ出土遺物（第30図）

140～148は堀切遺構埋土上から一括出土した京都系土師質土器皿である。口径8cm程度



第21図 三ノ丸地区第14トレンチ出土遺物実測図 (S=1/3)

のものと10cm程度のものの2種類があり、どちらも内面はナデにより整えられているが、外面及び底部には指頭圧痕が顕著である。また、10cm大のものには見込に型押しもしくは刷毛目調整の痕跡と思われる木目状圧痕が残っている。

149は中国製青磁瓶の肩部で、表面に唐草文を施す。

三ノ丸南斜面一括（第31～35図）

150は瀬戸美濃の灰釉皿である。ほぼ全体に淡緑色の釉薬がかかり、底部内面には、焼き台の痕跡がある。151・152は中国製青磁端反碗である。153・154は口縁部に雷文を施すものである。155は154と同一個体の可能性があるものである。見込みに圓線状の沈線を施すものである。高台畳み付け及び内面は無釉である。156・157は中国製染付碗である。156は外面は口縁部に界線を施し、内面には四方櫻文を施す。157は外面に界線と草花文を施す。158は李朝系の碗の底部である。全体に黄褐色の釉がかかり、見込み及び畠付には目跡が残る。159は李朝系の舟徳利である。外面及び内面頸部途中まで釉薬がかかる。160は藍彩小皿である。内面及び高台付近まで瑠璃色の釉薬がかかる。

161は備前系陶器の壺である。口縁部は内傾し端部は外側に折り曲げられている。

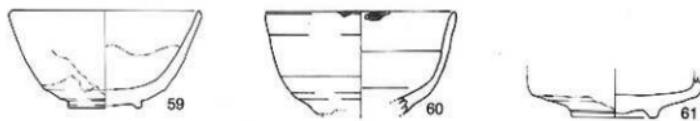
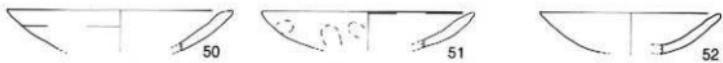
162～165までは中国製青磁の花瓶と思われる。器表面は二次焼成を受けており、所々に模様らしき沈線が観察できるが判然としない。162・163の破片は、断面を観察すると、粘土の継ぎ目に釉薬が見られ、それによって接合されていることがわかる。継ぎ目付近は内外に突帯が廻る。164は外面に沈線と文様らしきものが見受けられる。165は表面に波状の凹凸がある。

166は石臼の上臼である。側面には挽き木を差し込む穴が開いている。167は銅製の簪。168・169は軒平瓦である。168は中心飾りに三葉文を、左右に唐草文を2つ配する。

169は中心に小槌と2対の宝珠文を配し、左右には上下に枝分れする唐草文を配する。

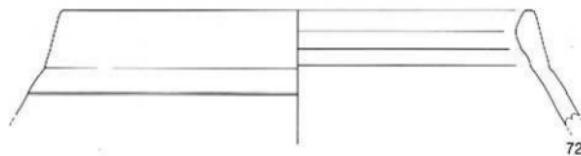
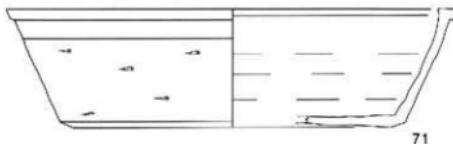
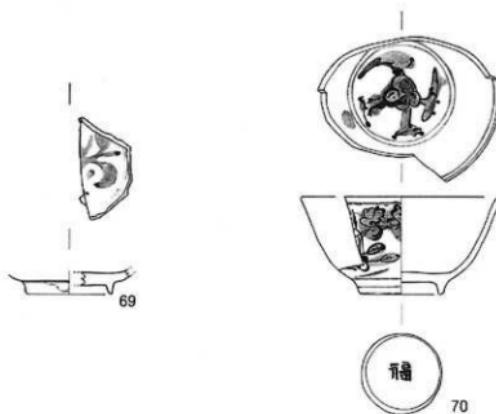
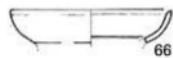
170は飾り瓦である。桐の葉状の文様が立体的に表現されており、桐文瓦の可能性がある。

171・172は棟節瓦。171は丸に食い違いの矢印文様を配するものである。172は立體的な波型文様が全面に配される。173は鬼瓦の破片と思われる。174は用途不明の板状の瓦である。長辺の一方の片面が反っており、反対側の辺沿いに穴が一つ開けられている。



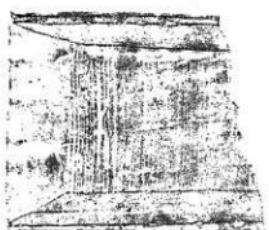
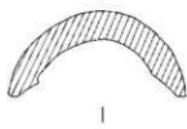
0 10cm

第22図 三ノ丸地区SB01出土遺物実測図(1) (S=1/3)

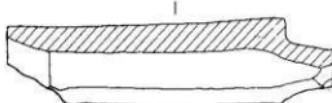


0 10cm

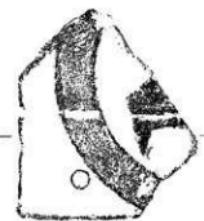
第23図 三ノ丸地区SB01出土遺物実測図(2) (S=1/3)



73



74



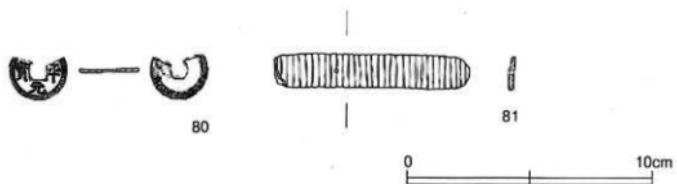
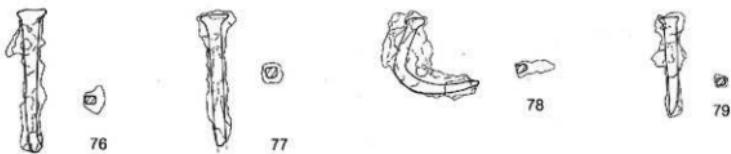
75



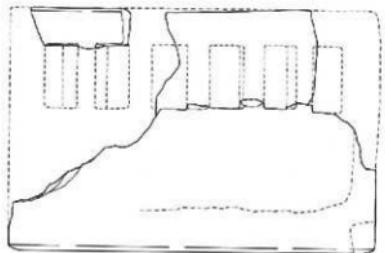
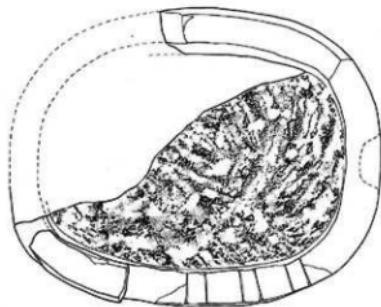
74

0 10cm

第24図 三ノ丸地区SB01出土遺物実測図(3) (S=1/4)



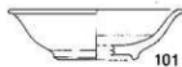
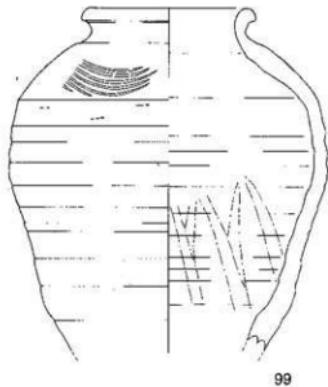
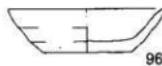
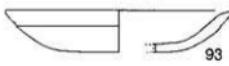
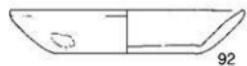
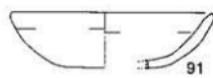
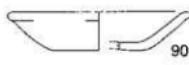
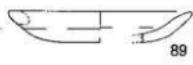
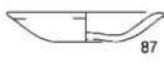
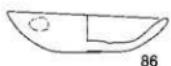
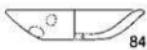
0 10cm



82

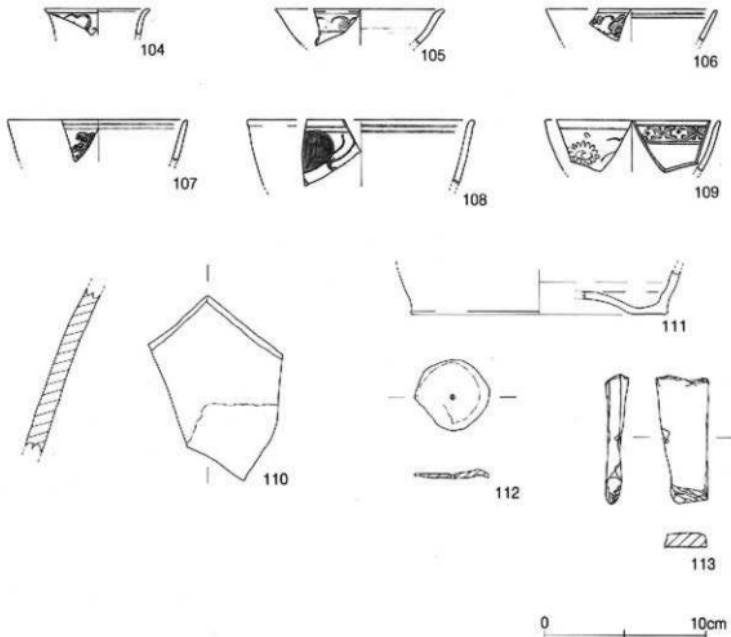
0 10cm

第25図 三ノ丸地区SB01出土遺物実測図 (4) (S=1/2, 82はS=1/3)



0 10cm

第26図 三ノ丸地区帶曲輪出土遺物実測図(1) (S=1/3)



第27図 三ノ丸地区帶曲輪出土遺物実測図(2) (S=1/3)

第2節 本丸地区

第1トレンチ (第36図175~178)

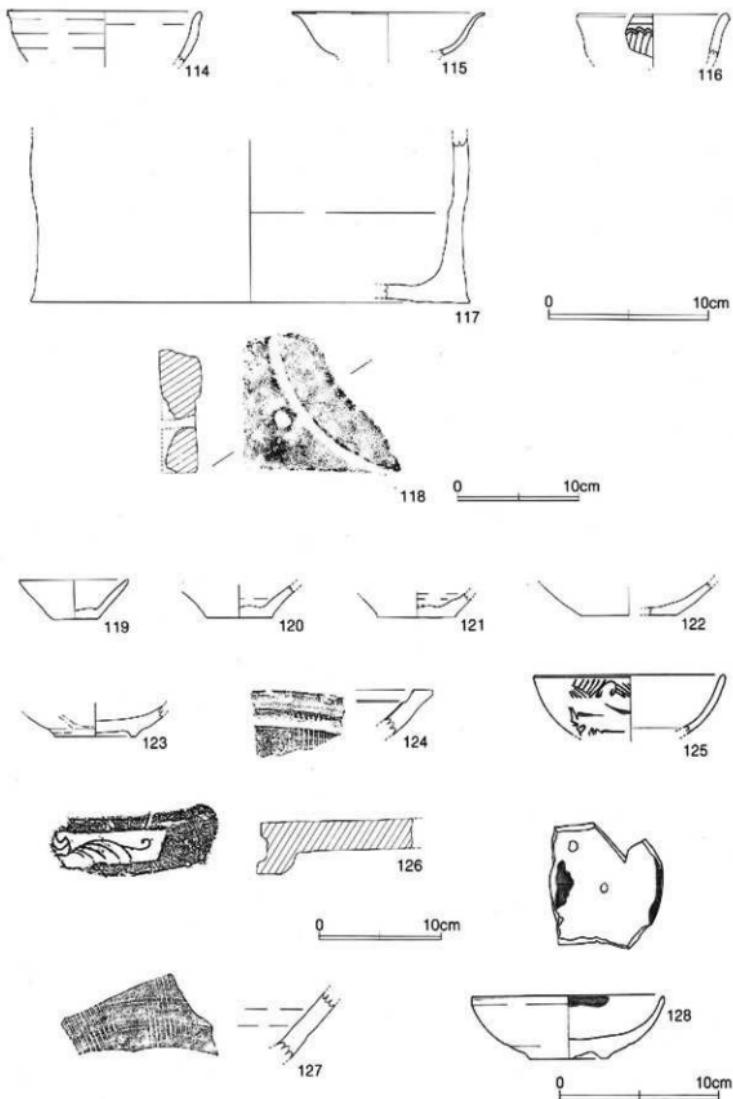
175は土師質土器皿である。底部は糸切底である。176は青磁盤である。内外面に濃緑色の釉薬がかかる。177・178は備前系陶器の擂鉢である。177は口縁部は外側がわずかに突出する。178は口縁部が大きく上方に伸び、口縁外面にはナデによる沈線が廻る。

第2トレンチ (第36図179~185)

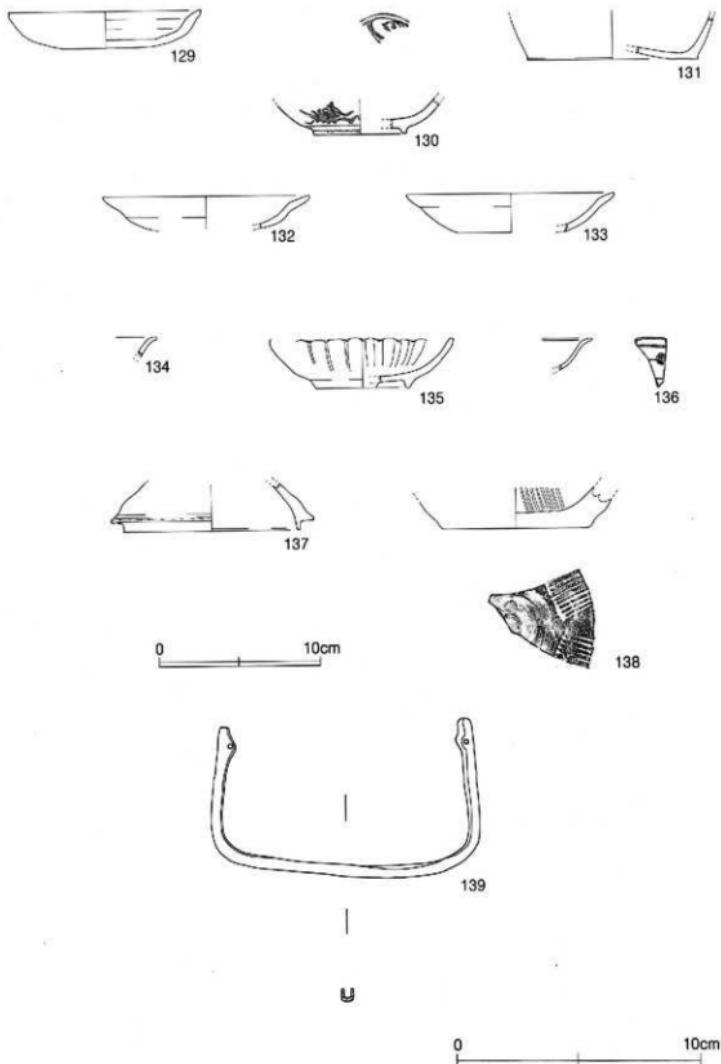
179は瀬戸美濃の天目茶碗である。180は青磁碗である。181は染付碗である。口縁部は端反りであり、外面に唐草文を施す。182は軒丸瓦である。巴文と珠文の間に圓線を廻らす。183~185は軒平瓦。183は中心飾りには上向きで中央の葉が点珠状になっている三葉文を配する。184は中心飾りには三葉文、左右には唐草文を2つ配する。185は中心飾りに立体的な宝珠を配し、左右に雲形の唐草文を施す。

第3トレンチ (第37図186~187)

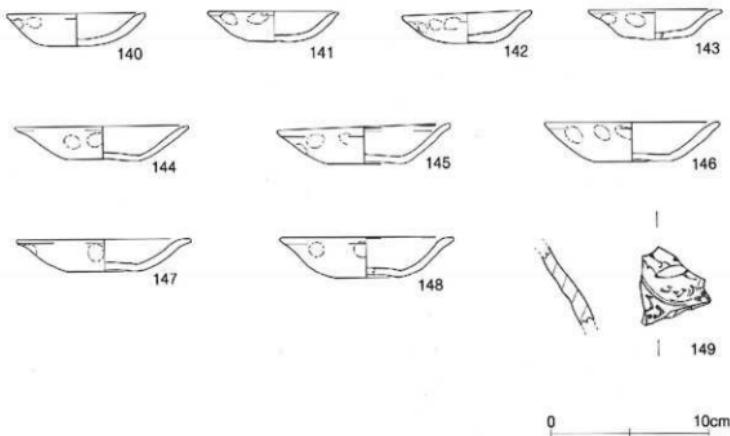
186・187は中国製染付皿である。186は見込に草木状の文様を施すもの、187は口縁内面に四方棒文を施すものである。



第28図 三ノ丸地区帶曲輪石垣前面出土遺物実測図（1）(S=1/3, 118,112は S=1/4)



第29図 三ノ丸地区帯曲輪第2遺構面出土遺物実測図(2) (S=1/3, 139は S=1/2)



第30図 三ノ丸地区第13トレンチ出土遺物実測図 (S=1/3)

第5トレンチ第1遺構面（第37図188～第38図198）

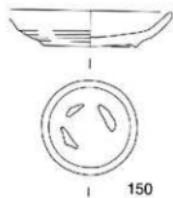
188・189は土師質土器皿、ロクロ成形で糸切底のものである。190は中国製白磁皿である。191・192は中国製染付である。191は基筒底皿と考えられ、外面に草花状の文様を施すもの、192は皿である。193は来待石製の石鉢の底部である。外面及び底面にノミ痕が顕著に見られる。194・195は軒丸瓦である。194は巴文の周間に19個の珠文を配するもの、195も同文と思われる。196は軒平瓦。中心飾りは三葉文で唐草文は左右2個づつである。197・198は丸瓦。両方とも内面にコピキB痕が残る。

第5トレンチ第2遺構面（第39図199～203）

199・200は京都系土師質土器皿である。199は胴部外面にわずかな段を持つ。201は中国製白磁皿、底部が基筒底のものである。202は青磁盤の底部である。全面に濃緑色の釉がかかる。203は備前系陶器壺である。口縁部は折り返しでつくられており、ナデが沈線状に廻っている。

本丸地区一括（第39図204）

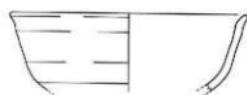
204は中国製染付皿である。基筒底皿と考えられ、口縁外面に格子状の文様を施す。



150



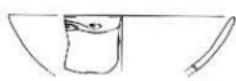
151



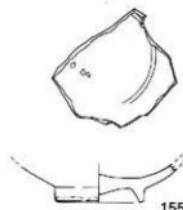
152



153



154



155



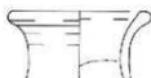
156



157



158

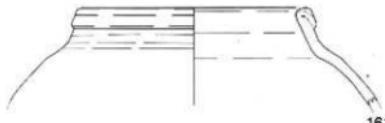


159



160

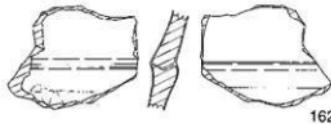
0 10cm



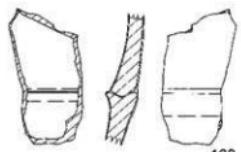
161

0 10cm

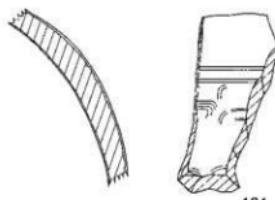
第31図 三ノ丸地区南斜面一括出土遺物実測図(1) (S=1/3, 161は S=1/6)



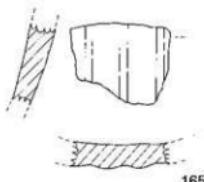
162



163



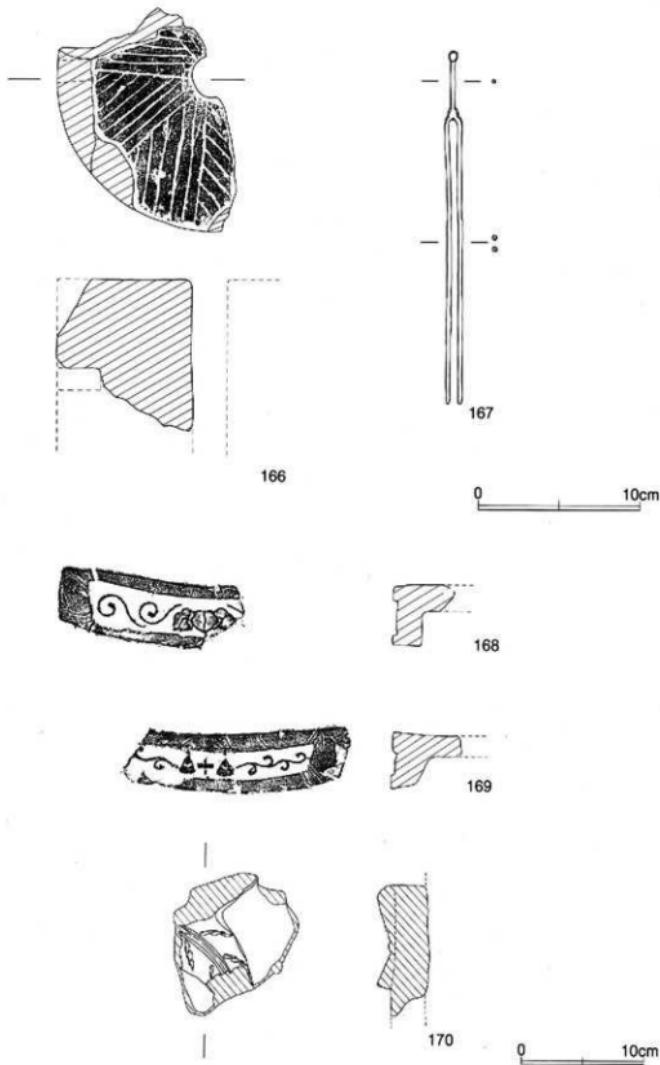
164



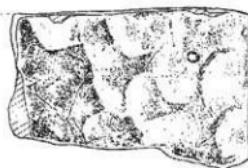
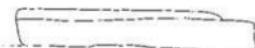
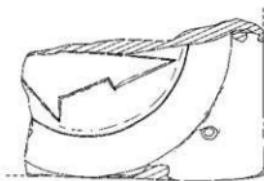
165

0 10cm

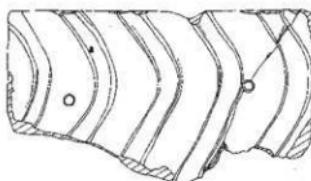
第32図 三ノ丸地区南斜面一括出土遺物実測図(2) (S=1/3)



第33図 三ノ丸地区南斜面一括出土遺物実測図（3）（166～167はS=1/3, 168～170はS=1/4）



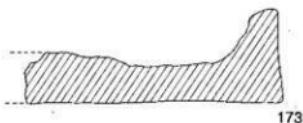
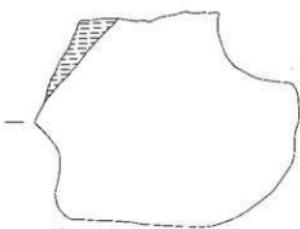
171



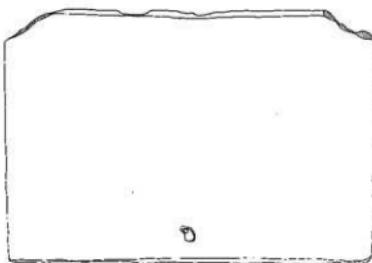
172

0 10cm

第34図 三ノ丸地区南斜面一括出土遺物実測図(4) (S=1/4)



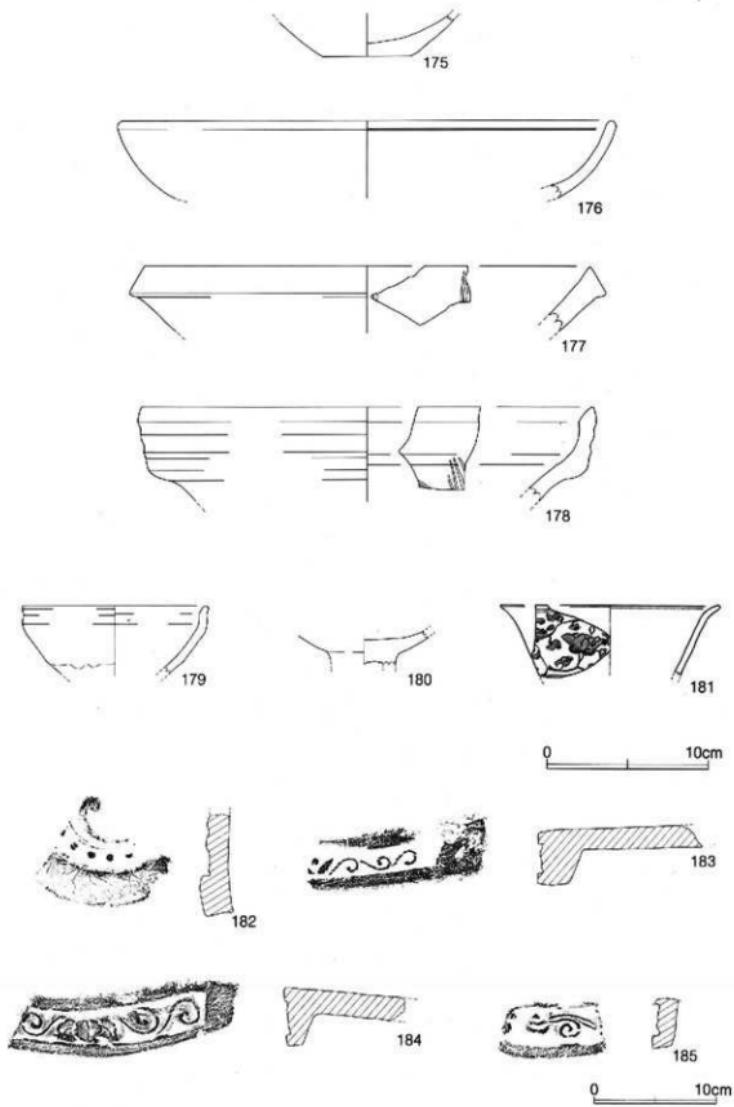
173



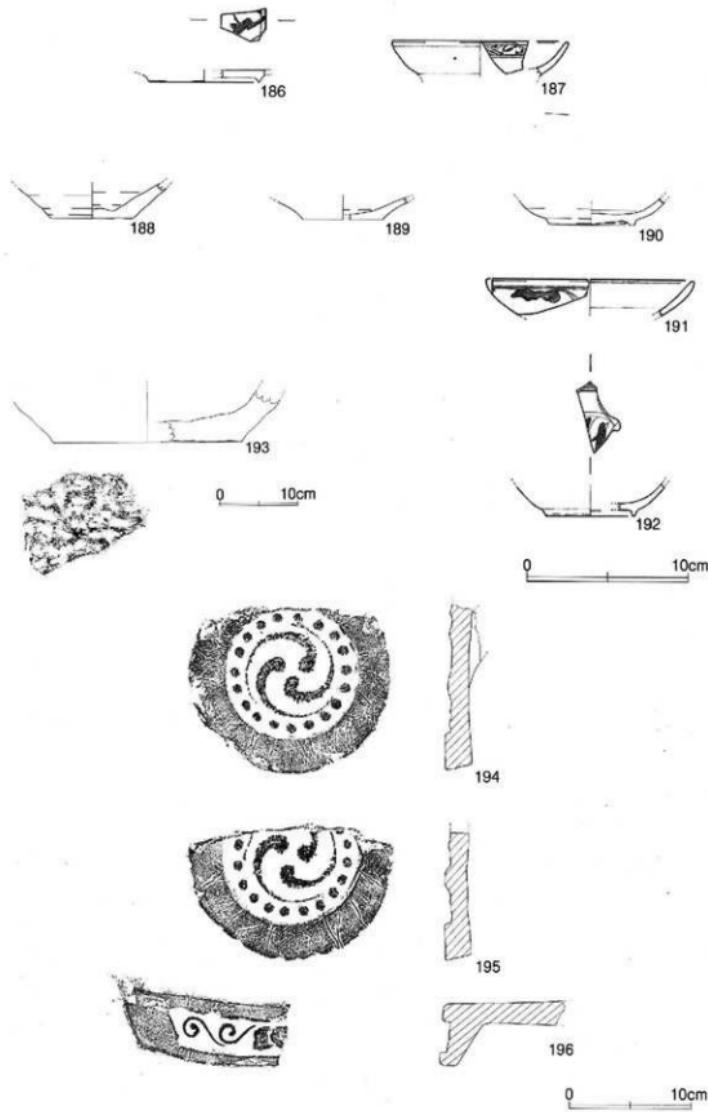
174

0 10cm

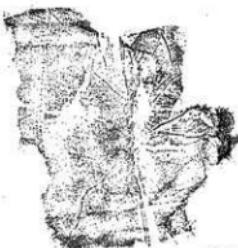
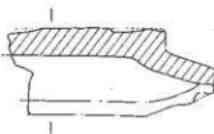
第35図 三ノ丸地区南斜面一括出土遺物実測図(5) (S=1/4)



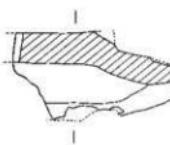
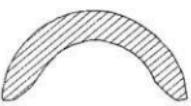
第36図 本丸地区出土遺物実測図（1）(S=1/3, 182~185はS=1/4)



第37図 本丸地区出土遺物実測図（2）(186~192はS=1/3, 193はS=1/6, 194~196はS=1/4)



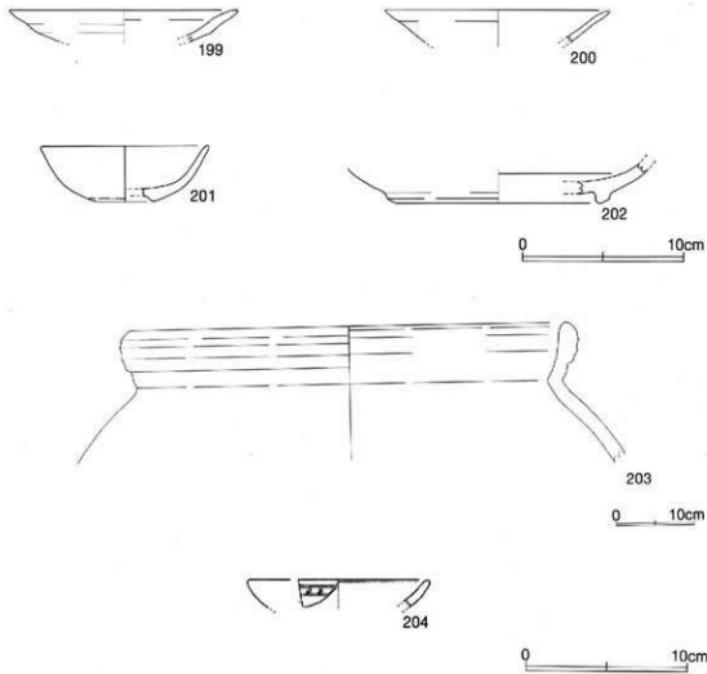
197



198

0 10cm

第38図 本丸地区出土遺物実測図(3) (S=1/4)



第39図 本丸地区出土遺物実測図 (4) (S=1/3, 203のみS=1/6)

表2 三ノ丸地区土器・陶磁器観察表

回数	品種・形態	出土位置(標記)	口径	底	高	断面	特徴	生産地	備考
1	土師質土器小口	第1号室	5.2cm		2.4cm				
2	土師質土器小口	第1号室	10.6cm						高輪系
3	土師質土器小口	第1号室	12.2cm						高輪系
4	土師質土器小口	第1号室	12.6cm						高輪系
5	土師質土器小口	第1号室	13.2cm						高輪系
6	土師質土器小口	第1号室	14.0cm						高輪系
7	土師質土器小口	第1号室	16.0cm						高輪系
8	土師質土器小口	第1号室	5.7cm				圓底ナメ		
9	土師質土器小口	第1号室	6.2cm				圓底ナメ		
10	土師質土器小口	第1号室	13.0cm	6.3cm	2.3cm	圓底ナメ		中国	
11	白釉貼花器	第1号室	11.0cm					中国	
12	白釉貼花器	第1号室	14.0cm					中国	
13	束付壺	第1号室			6.0cm		口沿に乳頭と乳化文	中国	
14	束付壺	第1号室			14.0cm		内外面に乳頭と乳化文	中国	小野52件
15	束付壺	第1号室			16.0cm		外腹に草花文、口縁内に四方神文	中国	小野12件、絶熱釉あり
26	土師質土器器皿	第2号室			8.4cm				高輪系
27	土師質土器器皿	第2号室			10.0cm				高輪系
28	土師質土器器皿	第2号室			12.0cm				高輪系
29	土師質土器器皿	第2号室			12.6cm				高輪系
30	土師質土器器皿	第2号室			13.0cm				高輪系
31	土師質土器器皿	第2号室			13.0cm				高輪系
32	土師質土器器皿	第2号室			13.0cm				高輪系
33	土師質土器器皿	第2号室			13.0cm				高輪系
34	円筒形化粧器	第2号室			10.0cm			中国	
35	深井式灰皿	第2号室			35.0cm			高輪系	
41	十字窓子器皿	第14号室			5.4cm				
45	青花器皿	第14号室							磁化釉あり
46	施釉陶器皿	第14号室							
47	土師質土器器皿	S B 0 1			12.0cm			中国	
48	土師質土器器皿	S B 0 1			12.0cm			中国	
49	土師質土器器皿	S B 0 1			12.0cm			中国	
50	土師質土器器皿	S B 0 1			14.0cm			中国	
51	土師質土器器皿	S B 0 1			15.2cm			中国	
52	土師質土器器皿	S B 0 1			15.2cm			中国	
53	土師質土器器皿	S B 0 1			16.0cm			中国	
54	土師質土器器皿	S B 0 1			17.4cm			中国	
55	土師質土器器皿	S B 0 1			7.6cm	3.2cm	圓底ナメ	中国	
56	土師質土器器皿	S B 0 1					5.4cm	高輪系	
57	施釉陶器皿	S B 0 1					10.4cm	4.4cm	高輪系
58	施釉陶器皿	S B 0 1					11.2cm	4.4cm	高輪系
59	施釉陶器皿	S B 0 1					11.6cm	4.4cm	高輪系
60	施釉陶器皿	S B 0 1					11.6cm	4.4cm	高輪系
61	施釉陶器皿	S B 0 1					11.6cm	4.4cm	高輪系
62	施釉陶器皿	S B 0 1					11.6cm	4.4cm	高輪系
63	施釉陶器皿	S B 0 1					12.4cm	4.4cm	高輪系
64	白釉反皿	S B 0 1					12.4cm	4.4cm	高輪系
65	白釉反皿	S B 0 1					12.4cm	4.4cm	高輪系
66	束付壺	S B 0 1					12.4cm	5.2cm	高輪系
67	束付壺	S B 0 1					12.0cm		高輪系
68	束付壺	S B 0 1					16.0cm		高輪系
69	束付壺	S B 0 1					5.4cm		高輪系
70	束付壺	S B 0 1					12.4cm	5.2cm	高輪系
71	施釉陶器皿	S B 0 1					28.0cm	19.6cm	外腹に圓軸ヘラケズリ
72	施釉陶器皿	S B 0 1					29.1cm		ペトナム?
83	土師質土器器皿	寺内			7.8cm				
84	土師質土器器皿	寺内			8.6cm	4.0cm	1.9cm		
85	土師質土器器皿	寺内			8.6cm	4.0cm	1.7cm		
86	土師質土器器皿	寺内			8.6cm	3.0cm	1.7cm		
87	土師質土器器皿	寺内			8.9cm	4.0cm	2.0cm		
88	土師質土器器皿	寺内			9.0cm	4.0cm	2.0cm		
89	土師質土器器皿	寺内			10.4cm	4.6cm	2.3cm		
90	土師質土器器皿	寺内			11.4cm	4.8cm	1.9cm		
91	土師質土器器皿	寺内			11.4cm	6.0cm	2.4cm		
92	土師質土器器皿	寺内			12.6cm	5.0cm	3.5cm		
93	土師質土器器皿	寺内			14.6cm	9.0cm	2.7cm		
95	土師質土器器皿	寺内			14.0cm	7.2cm	2.6cm		
94	土師質土器器皿	寺内			6.0cm	3.8cm	2.0cm	圓底ナメ	
95	土師質土器器皿	寺内							
96	土師質土器器皿	寺内							
97	土師質土器器皿	寺内							
98	土師質土器器皿	寺内							
99	附足器	寺内			10.0cm				備註
100	附足器	寺内			6.0cm				備註V期
101	附足器	寺内							
102	白釉反皿	寺内			10.0cm	5.2cm	3.1cm		高輪系2件
103	青花器皿	寺内			14.4cm				高輪系
104	青花器皿	寺内			8.0cm				高輪系
105	灰陶小鉢	寺内			10.6cm				高輪系あり
106	灰陶小鉢	寺内			10.8cm				高輪系
107	灰陶小鉢	寺内			14.2cm				高輪系
108	灰陶小鉢	寺内			14.2cm				高輪系
109	灰陶小鉢	寺内			11.0cm				高輪系
110	灰陶小鉢	寺内							タイ?
111	灰陶小鉢	寺内							台灣
112	施釉陶器皿	寺内					15.8cm	タキ形底	高輪系
113	施釉陶器皿	寺内							高輪系
114	施釉陶器皿	寺内							高輪系
115	白胎器	寺内							中国

番号	種類・器形	出土位置(層位)	H	幅	高さ	特徴	生産地	備考
116	青釉鏡	空石井石斑(下-4)	9.8cm			縦縞模写文	中国	
117	青釉鏡	空石井石斑(下-4)			27.4cm		中国	
118	土師質土器皿	空石井石斑(下-3)			6.0cm	2.7cm	内軸ナラ	
119	土師質土器皿	空石井石斑(下-3)				4.2cm	内軸ナラ	
120	土師質土器皿	空石井石斑(下-3)				4.8cm	内軸ナラ	
121	土師質土器皿	空石井石斑(下-3)				6.0cm	内軸ナラ	
122	木筋質土器皿	空石井石斑(下-3)				6.0cm	内軸ナラ	
123	木筋質土器皿	空石井石斑(下-3)				6.0cm	内軸ナラ	
124	陶器質土器皿	空石井石斑(下-3)				6.0cm	内軸ナラ	
125	朱付瓶	空石井石斑(下-3)			12.0cm		越前	
127	陶器質土器皿	空石井石斑(下-3)				縫り口10cm	越前	
128	陶器質土器皿	空石井石斑(下-3)				足込と口縁に鉛錆、目跡止め	肥前	
129	土師質土器皿	空石井石斑2連鏡(下-7)	12.0cm	6.6cm	2.2cm		東御系	
130	朱付瓶	空石井石斑2連鏡(下-7)			5.8cm		小野古1層	
131	炳毛刷器皿	空石井石斑2連鏡(下-7)			10.6cm	タキ皮底	肥前	
132	土師質土器皿	空石井石斑2連鏡(下-10)			12.8cm		東御系	
133	「印傳」記入	空石井石斑2連鏡(下-10)			13.0cm	6.6cm	2.4cm	京部系
134	炳毛刷	空石井石斑2連鏡(下-10)					京部系	
135	青釉陶花口	空石井石斑2連鏡(下-10)			11.2cm	5.6cm	3.1cm	中国
136	朱付瓶	空石井石斑2連鏡(下-10)			12.6cm		小野古1層	
137	施施器器皿	空石井石斑2連鏡(下-10)					不明	
138	陶器質土器皿	空石井石斑2連鏡(下-10)					備前	
139	土師質土器皿	第13丁レンチ			8.6cm	2.5cm	2.0cm	京部系
140	土師質土器皿	第13丁レンチ			8.2cm	3.2cm	1.9cm	京部系
141	土師質土器皿	第13丁レンチ			8.0cm	3.0cm	1.9cm	京部系
142	土師質土器皿	第13丁レンチ			8.4cm	4.0cm		京部系
143	土師質土器皿	第13丁レンチ			10.0cm		見込みに木目状痕	京部系
144	土師質土器皿	第13丁レンチ			10.7cm	4.8cm	2.3cm	京部系
145	土師質土器皿	第13丁レンチ			10.8cm	4.8cm	2.4cm	京部系
146	土師質土器皿	第13丁レンチ			10.8cm	4.8cm	2.5cm	京部系
147	土師質土器皿	第13丁レンチ			10.8cm	4.8cm	2.6cm	京部系
148	土師質土器皿	第13丁レンチ			10.8cm	4.0cm	2.5cm	京部系
149	青釉鏡	第13丁レンチ				見込みに木目状痕	京部系	
150	施施器器皿	*新丸一括			10.0cm	5.8cm	2.2cm	台内に口縁
151	青釉鏡	南斜面一括			13.4cm			南斜面一括
152	青釉鏡	南斜面一括			14.0cm			南斜面一括
153	青釉鏡	南斜面一括			12.0cm		南文	小野古
154	青釉鏡	南斜面一括			14.0cm		南文	小野古
155	青釉鏡	南斜面一括				5.5cm	見込みに北向、高台無脚	小野古
156	朱付瓶	南斜面一括					15丁同じ無脚?	
157	朱付瓶	南斜面一括			10.8cm		外由無脚、内面四方無文	小野古
158	朱付瓶	南斜面一括			13.2cm		小野古	小野古2層
159	施施器器皿	朱斜面一括				4.1cm	見込み及び右向に口縁	朝鮮
160	施施器器皿	朱斜面一括			8.8cm			朝鮮?
161	施施器器皿	朱斜面一括				3.4cm		施施
162	青釉陶花口	朱斜面一括					施施	施施2層
163	青釉陶花口	朱斜面一括					内向外型	
164	青釉陶花口	朱斜面一括					内向外型	
165	青釉陶花口	朱斜面一括					外向に支脚あり	
166	青釉陶花口	朱斜面一括					表裏共に口縁	
167	青釉陶花口	朱斜面一括					中国	

表3 三ノ丸地区軒瓦観察表

番号	種類	出土位置	厚度(mm)	長さ	幅	厚さ	特徴	備考
16	新丸一	第1トレンチ	16.4cm	1.8cm	1.8cm	1.15	コビキB	
17	新丸一	第1トレンチ	17.2cm	1.8cm	1.8cm	1.15	コビキB	
18	新丸一	第1トレンチ	16.9cm	3.0cm	2.0cm	1.15	コビキの文様	コビキA
19	新丸一	第1トレンチ			2.2cm	半分に二重文、腹半分左右互い		
20	新丸一	第1トレンチ			2.0cm	半分に二重文、腹半分は左互い		
21	新丸一	第1トレンチ			1.7cm	半分に木目状痕文2つ		
30	新丸一	第1トレンチ				木目状の文様		
125	新丸一	空石井石斑(下-8)			2.4cm	小内に失状文、裏手は波状		
168	新丸一	空石井石斑(下-8)			2.2cm	小内に第三脚、腹半分は右互い		
169	新丸一	空石井石斑(下-8)			1.7cm	半分に木目状波状文2つ		

表4 三ノ丸地区丸瓦・平瓦他観察表

番号	種類	出土位置	長さ	幅	厚さ	特徴	備考	
22	丸瓦	第1トレンチ	12.0cm	15.8cm	3.4cm	内面に沿り斜面	コビキA	
23	丸瓦	第1トレンチ	34.0cm	1.8cm	2.8cm		コビキB	
24	丸瓦	第1トレンチ	30.5cm	16.0cm	2.5cm	内面に沿り斜面とノミ痕	コビキA?	
25	丸瓦	第1トレンチ	31.5cm	16.0cm	2.5cm	内面に沿り斜面	コビキA	
26	丸瓦	第1トレンチ	33.4cm	16.0cm	2.5cm	内面に沿り斜面	コビキA	
27	丸瓦	第1トレンチ	32.2cm	16.0cm	2.5cm	内面に沿り斜面	コビキA	
41	丸瓦	第1トレンチ	33.6cm	15.4cm	2.8cm	内面に沿り斜面	コビキA	
42	平瓦	第1トレンチ	26.7cm	2.6cm	2.6cm	表面に横状のコビキ痕	コビキA	
43	平瓦	第1トレンチ	26.7cm	2.6cm	2.6cm	表面に横状のコビキ痕	コビキB	
73	丸瓦	S.R.O.1	14.5cm	2.4cm	2.3cm		コビキA	
74	丸瓦	S.R.O.1	26.8cm	12.9cm	3.0cm		コビキA	
75	飾り瓦	S.R.O.1			3.0cm	内面に尖状突起、腹に穿孔		
118	飾り瓦	空石井石斑(下-4)			3.4cm	内状文、腹内に穿孔		
170	飾り瓦	空石井石斑(下-4)			4.0cm	立脚的な削削状の文様	病文?	
171	飾り瓦	空石井石斑(下-4)	19.4cm	13.2cm	3.4cm	内面に尖状突起、腹内に穿孔		
172	飾り瓦	空石井石斑(下-4)			26.0cm	立脚的な削削状の文様、穿孔2ヶ所		
173	飾り瓦	空石井石斑(下-4)			17.8cm	21.4cm	7.7cm	瓦底の一部?
174	波紋瓦	空石井石斑(下-4)			30.0cm	20.7cm	3.5cm	片方の瓦底部分をやがて反っている

表5 三ノ丸地区石製品・土製品観察表

番号	種類	出土位置	長さ	幅	厚さ	特徴	備考
36	瓦石	第1トレンチ	16.5cm	4.2cm		縦き裂に鉄錆	福岡器
37	山臼	第1トレンチ				表面に被熱	条件石

回数	種類	出土位置	大きさ	幅	高さ	特徴	備考
82	バングル	S B 0 1	23.1cm(横) 18.7cm(縦) 15.0cm(高)	内側に焼け跡、底面内面にノミ痕。	砂谷石		
112	銅鋤	金手鋤		4.7cm	0.4cm	土器質土器の表面に浮き出る。	
113	瓦石	金手鋤		8.0cm	3.2cm	0.9cm	複数枚
199	石臼	南斜面一括					黄灰岩

表6 三ノ丸地区金属製品観察表

回数	種類	出土位置	大きさ	幅	高さ	特徴	備考
76	鉄剪	S B 0 1		3.9cm	0.2cm		
77	鉄剪	S B 0 1		5.1cm	0.5cm		
78	鉄剪	S B 0 1			0.2cm		
79	鉄剪	S B 0 1			0.4cm		
80	銅鏡	S B 0 1	2.4cm(横)		0.15cm	表面に「辛元寶」の文字	銅鏡
81	小鏡	S B 0 1		8.0cm	1.4cm	0.2cm	鏡面は中央の周縁部、片面に凹版、兩面
129	銅鏡	第2層標面(1'-10')		10.9cm	0.5cm	0.3cm	平、鏡面中央にこの字型、火曜印跡。用意不明
167	銅鏡	第2層標面(1'-10')		21.8cm	1.2cm		

表7 本丸地区土器・陶磁器観察表

回数	種類	出土位置(層位)	口径	底径	高さ	特徴	生産地	備考
175	上層土器	第3トレンチ			5.6cm	同軸ナメ		
176	青釉盤	第3トレンチ	30.8cm				中国	
177	陶器蓋	第3トレンチ	27.6cm			口縁下端部がわずかに壊れる	青瓷	周邊V期
178	陶器蓋	第3トレンチ	25.0cm			口縁がくの子に内反する	青瓷	周邊V期
179	陶器蓋	第3トレンチ	11.6cm			内縁及び外縁端部まで施釉	青瓷	周邊V期
180	青釉瓶	第3トレンチ				見込みに印花文、裏面に無施釉	小物	
181	青釉瓶	第3トレンチ	13.6cm			口縁部に圓窓、外縁に印花文	小物	
186	免付瓦	第3トレンチ			6.8cm	口縁内面に四方導文	中國	小野瓦群?
187	免付瓦	第3トレンチ	11.0cm			口縁内面に四方導文	中國	小野瓦群?
188	土器質土器皿	第5トレンチ第1造標面			5.8cm	同軸ナメ		
189	土器質土器皿	第5トレンチ第1造標面			5.8cm	同軸ナメ?		
190	白磁皿	第5トレンチ第1造標面			5.4cm		中国	
191	免付瓦	第5トレンチ第1造標面	13.0cm				森田V群	
192	免付瓦	第5トレンチ第1造標面			5.4cm		小野C群	
193	土器質土器皿	第5トレンチ第2造標面	14.2cm				小野瓦群	
200	土器質土器皿	第5トレンチ第2造標面	14.0cm				瓦器系	
201	白磁皿	第5トレンチ第2造標面	10.4cm	3.2cm	3.4cm	第5区	中間	森田V群
202	青磁盤	第5トレンチ第2造標面			12.6cm		中間	
203	青磁盤	第5トレンチ第2造標面			56.0cm		同上	周邊V期
204	免付瓦	西奈山窯一括			11.4cm			小野C群

表8 本丸地区軒瓦観察表

回数	種類	出土位置	瓦先端(回)	長さ	厚さ	特徴	備考
182	軒瓦	第5トレンチ	第5トレンチ第1造標面			巴式と唐文の間に圓窓、唐文小	
183	軒平瓦	第2トレンチ		1.8cm		上内及三端文(中央部は点線状)	
184	軒平瓦	第3トレンチ		1.9cm		二端文	
185	軒平瓦	第2トレンチ				立体的な二端文、幕状の輪廊文	
186	軒丸瓦	第5トレンチ第1造標面	16.3cm			珠文19	
188	軒丸瓦	第5トレンチ第1造標面	16.3cm			連続文19	
190	軒丸瓦	第5トレンチ第1造標面			2.0cm	二端文	

表9 本丸地区丸瓦観察表

回数	種類	出土位置	瓦先端(回)	長さ	幅	名	軒 瓦	備考
197	丸瓦	第6トレンチ第1造標面		15.4cm	2.2cm		コピキ目	
198	丸瓦	第5トレンチ第1造標面		15.2cm	2.5cm		コピキ目	

表10 本丸地区石製品・土製品観察表

回数	種類	出土位置	口径	底径	高さ	特徴	備考
193	石鉢	第5トレンチ第1造標面	24.0cm			外縁及び底盤にノミ痕。	牛骨山

第V章 まとめ

第1節 三ノ丸地区

三ノ丸地区の南斜面部では西袖ヶ平から二ノ丸方面へ続く通路状遺構と石垣、帶曲輪及び礎石建物跡を、三ノ丸曲輪内からは柱穴群及び堀切遺構、溝状遺構を検出した。

石垣は荒く割った石材の隙間に細かい石材を埋ませながら積み上げており、また隅角部分に算木積みを用いていない点が注目される。この特徴は山頂部特に三ノ丸・二ノ丸部分に顕著であり、山麓の山中御殿平の算木積みを多用した石垣とは明らかに様相を異にするものである。

また出土する軒丸瓦及び丸瓦の製作技法の傾向から見ても、山中御殿平から北側の曲輪群では一般的に天正年間（1572～）以後に近畿地方周辺で現れ、岡山城など地域によっては1600年前後から使用が始まる技法とされるコビキB技法が主体であり、それより以前のものとされるコビキA技法を用いた瓦が見られないのに対し、山頂部ではコビキB瓦に混じって一定量のコビキA瓦が見られる。

陶磁器等の出土遺物では、山中御殿平以北の曲輪群からは17世紀のものと考えられる絵唐津の皿や伊万里焼が出土するのに対し、山頂部では石垣埋没土及び帶曲輪第1遺構面上から出土する小野編年E群の染付の碗や皿、及び16世紀末頃の肥前系陶器が最も新しく、17世紀にかかる鉄絵を施した肥前系陶器や初期伊万里、また小野編年F群の染付などは全く見受けられない。

これらの事象から推察するに、山中御殿平以北の曲輪群は1600年前後の比較的新しい時期に大規模な改修を受けているのに対し、山頂部の曲輪群、少なくとも三ノ丸及び二ノ丸については、あまり大きな改修を受けずに16世紀後半に改修を受けた繩張りがほぼそのまま継続して使用されているとみられる。

この事は同時代の他地域の城と同様に、16世紀末以降に山城の意味が薄れ、城の機能の中心は山麓の曲輪もしくは館に移り、山頂部の構造物は城のシンボルとしてのみ存続する傾向と一致するものと言えよう。

三ノ丸地区では、上記の石垣及び礎石建物以外に、その下層にも遺構が存在することを確認した（第2遺構面）。この遺構面からは掘切跡、帶曲輪状遺構を検出し、掘切跡は部分的な検出にとどまっているため遺構の時期については断言出来ないが、埋土の状況から帶曲輪状遺構とほぼ同時期に埋没したと考えられる。

第2遺構面からは小野編年B1群の染付皿や問壁V期の備前系陶器など、16世紀第3四半期を中心とした遺物が出土しており、第1遺構面でみられる肥前系陶器や瓦は出土しない。土師質土器も京都系の皿のみが出土し、底部糸切のものは出土しない。この第2遺構面と同時期もしくはそれ以前の遺物は今回調査地域のほぼ全域から出土しており、その量は16世紀末以降とみられる遺物に比べて圧倒的に多い。

遺物の出土状態で注意される点は、16世紀第3四半期のもの、加えて威信財とみられる高級陶磁器類は、全てが破碎された状態で出土し、かつ二次的焼成を受けて器表面が荒れているものが多く見受けられることである。その理由として考えられるのは永禄9年

(1566) の尼子氏の富田城開城である。開城に際し、尼子氏もしくは毛利氏の手によって城内にあった器物が破棄されたものと見られる。このことから第2遺構面の帯曲輪状遺構及び堀切跡は尼子氏在城期の遺構である可能性があると考えられる。

第2節 本丸地区

本丸地区からは帯曲輪部分から二時期にわたる遺構面とそれらに伴う石垣や柱穴、溝状遺構等を検出した。この内第1遺構面では第2トレンチで小規模な石垣を、また第5トレンチでは瓦溜まりを検出した。石垣は部分的なものであることから、曲輪壁面の脆弱な部分を補強する目的で構築されたものと考えられる。また、石垣に混入されたもの、及び遺構面上から出土した軒丸瓦、丸瓦のコビキ痕は全てBであることから、この遺構面は16世紀第4四半期～17世紀初頭頃に構築されたと考えられる。

第1遺構面の下層には第2遺構面を検出した。この遺構面からは16世紀第3四半期のものを中心とした陶磁器が出土しており、また土師質土器も京都系皿のみが見られ、第1遺構面で見られる糸切り平底のものは出土しない。この傾向は三ノ丸地区と同様であり、この遺構面も尼子氏在城期の遺構の可能性がある。

第3節 山中御殿平・花ノ壇地区

山中御殿平・花ノ壇地区では柱穴と溝状遺構、また山中御殿平多聞櫓石垣の普請に関連した遺構を検出した。

この地区的調査成果で注目すべき点は、石垣の構築状況の一端を明らかにできた事である。石垣は尾根筋に対して直行する、床面がほぼ水平な掘り方を掘削し、そこから石材を積み上げた後に掘り方を埋め戻している。石垣の角石は算木積みを用いており、根石の下に胴木は見受けられなかった。地盤は硬質の真砂土で比較的の頑丈であることから、胴木を据えていなかった可能性もある。

石垣の足元には多量の瓦片が散乱しており、石垣上の建築物が廃棄された際に投棄されたものと考えられる。

瓦はほとんどが平瓦であったが、わずかに見られた丸瓦のコビキ痕はBである。

この石垣の構築時期は掘り方内から遺物が出土していないため不明であるが、角石が算木積みであること、また瓦はコビキBのみが見られる事など、月山山頂部の遺構の様相とは明らかに異なり、新しい要素が多く見られる事から、17世紀初頭頃の遺構と考えられる。

第4節 富田城跡出土軒丸・軒平瓦について

富田城跡では発掘調査の結果、特に月山山頂部及び山麓部の山中御殿平地区から多くの瓦が出土している。しかし現在までに瓦について具体的に分類・編年作業が行われたことはなかった。その理由としては、瓦そのものに対する関心が薄かったこと、出土状況が城の廃絶時に一括で破却された状態であるため、層位的に区別することが困難であることに由来する。そこで今回は今後の研究作業の叩き台として、城内で普遍的に出土する軒丸瓦

及び軒平瓦について文様の特徴等から分類を試みていく事とした。

なお、この分類に使用した瓦は、今回報告した三ノ丸地区出土の資料に加え、平成8年度三ノ丸北面石垣が調査された際に出土した瓦も含まれ、また分類表は時期的変遷を示すものではない。

(軒丸瓦Ⅰ類) 三巴文と珠文を配するもの。

- I-A類 巴文は左巻きで細め。珠文は小さめで17個程度、巴文と珠文の間に細い囲線を持つ。コビキはB。
I-B類 巴文は左巻きでやや太め、珠文は大きめで15~19個程度のものがある。囲線はない。コビキはB。

(軒丸瓦Ⅱ類) 三巴文以外の文様を配するもの。

- II-A類 瓦当面にやや傾いた「巴」字状の文様を持つ。コビキはA。

(軒平瓦A類) 中心飾りに三葉文を配するもの。

- A-1類 中心飾りは三葉で葉脈は簡素である。唐草文は外側が下方へ、内側が上方に巻く。
A-2類 三葉の葉脈を表現するもの。それ以外はA-1類と同型。
A-3類 中心飾りは上方向に開く三葉文で中央の葉は点珠状になっている。両側に各3個ずつの唐草文を配する。

(軒平瓦B類) 中心飾りに宝珠を配したもの。

- B-1類 宝珠が立体的に表現され、左右に雲形の唐草文を配置する。
B-2類 宝珠が線状に表現され、左右の唐草文は波状を呈する。
B-3類 中央に小槌、左右に宝珠を配する中心飾りを持つ。唐草文は上下2箇所ずつ枝分かれしている。

出土瓦の傾向

富田城跡での瓦の出土は月山山頂郭群及び山麓部の山中御殿平地区に特に顕著である。しかしその出土状況は、廃城時に石垣上から一括投棄された状態であるため。出土層位から各形式の年代を把握することが困難であるが、ここでは文様、技法などの特徴から、可能な限り各形式の前後関係について考えることとする。

軒丸瓦Ⅰ類はI-A、I-B類とともに三巴文と珠文を配し、いぶしが行われ内面のコビキ痕がBのものである、I-A類は珠文が小ぶりで巴文と珠文の間に囲線を持つものである。I-B類は珠文数に3タイプが見られ、これが工人差なのか、それとも時期差によるものかは今のところ不明である。I類全てに共通している事象としては、瓦当の縁の幅が3cm程度を測り、松江城や米子城など近隣の城郭から出土する軒丸瓦に比べ幅広なことである。

軒丸瓦Ⅱ類は瓦当部に「巴」字状の文様を持つもので、いぶしが見られず色調は青灰色を呈する。内面のコビキ痕はAであることから、この瓦はI類の軒丸瓦に先行するものと

考えられる。

軒平瓦についてはそれぞれの時期を判断する事は非常に難しい。

軒平瓦A-1類は山頂部を始め、山中御殿平等で最も多く出土することから、比較的新しい時期のものと考えられ、年代としては16世紀末~17世紀初頭頃と解釈したい。⁽¹⁾

A-2類とA-3類については山頂部のみの出土で、それぞれ一点のみの出土であるためここでは言及を避けることとする。

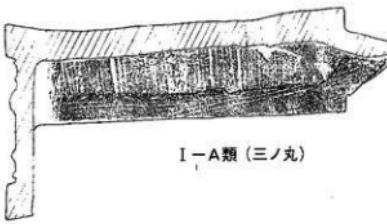
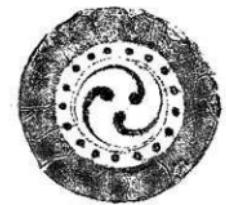
B類は中心飾りに宝珠文をモチーフにした文様を持つもので、左右に雲状、波状などの唐草文を配したものである。B-1類にはいぶしが施されているが、B-2類とB-3類については明確ないぶしが見られず、色調は青灰色を呈する。

山頂部の三ノ丸・二ノ丸・本丸の調査の際出土した瓦は、今回分類した各形式全てが見られ、共伴する丸瓦はコビキBのものを主体とするが、コビキAのものも一定量見られる。また城内でも比較的新しい時期に改修されたと考えられる山中御殿平等山麓の曲輪群ではコビキBの丸瓦のみが見られ、軒瓦も実見しうる限りでは軒丸瓦T-B類と軒平瓦A-1類、B-1類は存在するが、他の形式は見られない。

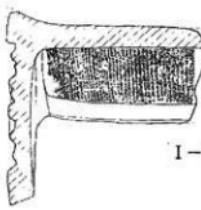
山頂部で出土する軒丸瓦I-A類は典型的なコビキB技法が用いられており、これは富田城では比較的新しい要素と言えるのかもしれない。また、これと同型式と考えられる軒丸瓦が松江城二ノ丸太鼓櫓西方で検出された17世紀初頭の遺構と見られるSK-01内から、堀尾家の家紋である分銅文の軒丸瓦と一緒に出土している。⁽²⁾

また、軒平瓦B-3類と同型の瓦は米子城跡及び岡山城跡からも出土しており、同范である可能性も含めてその関連が注目される。

- (1) 中井 均 1994『織田系城郭の特質について－石垣・瓦・礎石建物－』織豊城郭創刊号
この中で筆者は富田城山中御殿平出土瓦の年代を慶長年間の堀尾氏在城期のものとしている。
- (2) 『史跡松江城整備事業報告書（第2分冊：調査編）』松江市教育委員会 2001
- (3) 「米子城跡9遺跡」財団法人 米子市教育文化事業団 1997
- (4) 岡山市教育委員会 乘岡 実氏のご教示による。



I-A類（三ノ丸）



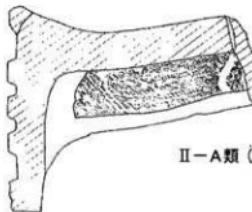
I-B類（三ノ丸）



（三ノ丸）



（本丸）



II-A類（三ノ丸）

0 10cm

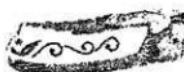
第40図 軒丸瓦分類図 (S=1/4)



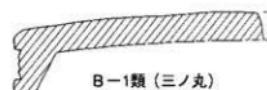
A-1類（三ノ丸）



A-2類（三ノ丸）



A-3類（三ノ丸）



B-1類（三ノ丸）



B-2類（三ノ丸）



B-3類（三ノ丸）

0 10cm

第41図 軒平瓦分類図 (S=1/4)

図 版



富田城跡遠景（北西から）



第1トレーニチ石垣検出状況（北西から）

図版2



第1トレンチ通路跡土層断面（北西から）



第1トレンチ通路跡土層断面（北西から）



通路跡端部（北西から）



第4トレンチ石垣検出状況（南西から）

図版4



第4トレンチ石垣部土層断面（南東から）



第4トレンチ通路跡土層断面（南東から）



第4トレンチ通路跡土層断面（南東から）



通路跡石列（南西から）

図版6



第4トレンチ南西端部土層断面（南東から）



第5トレンチ石垣検出状況（南西から）



第8トレンチ石垣検出状況（南西から）



第8トレンチ土層断面（北西から）

図版8



第14 トレンチ石垣検出状況（南西から）



SB01検出状況（北西から）



SB01完掘状況（北西より）

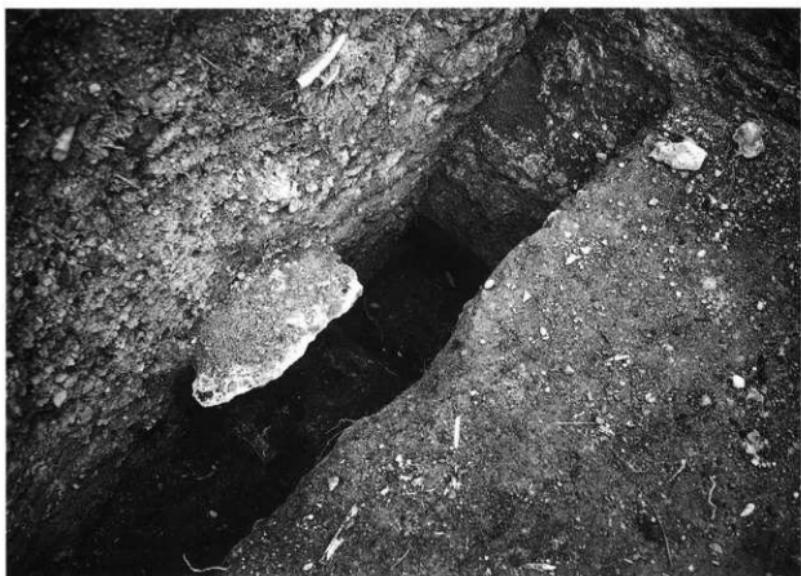


堀切遺構検出状況（南西より）

図版10



第2遺構面検出状況（北東から）



第2遺構面清状遺構検出状況（南から）

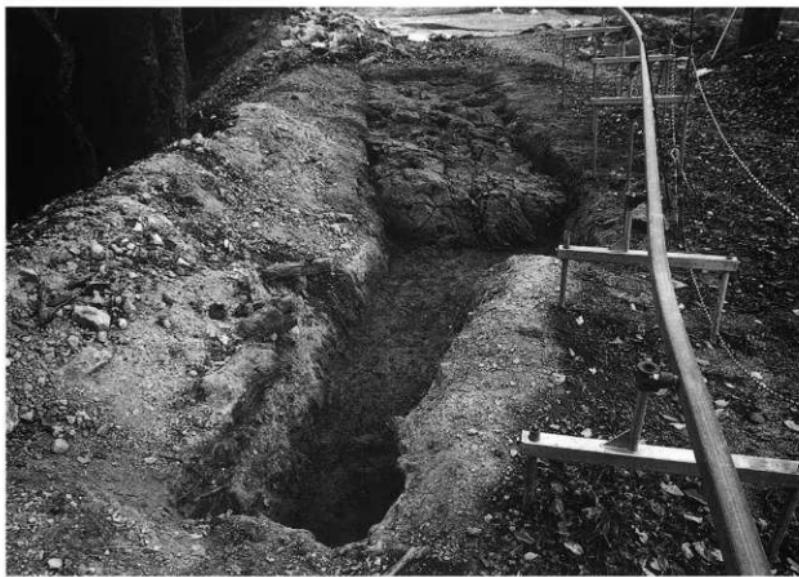


第13トレンチ完掘状況（北西から）



第13トレンチ堀切遺構検出状況（西から）

図版12



第15トレンチ堀切遺構検出状況（北西から）



第15トレンチビット検出状況（西から）



第16トレンチ遺構検出状況（東から）



本丸地区調査地遺景（北西から）

図版14



第1トレンチ完掘状況（北から）



第2トレンチ遺物出土状況（北西から）



第2トレンチ石垣（北西から）



第3トレンチ完掘状況（北西から）

図版16



第4トレンチ完掘状況（北西から）



第5トレンチ完掘状況（北西から）



本丸地区堀切部分全景（左・本丸、右・二ノ丸）

図版18



調査地近景（西から）



瓦片出土状況（北から）

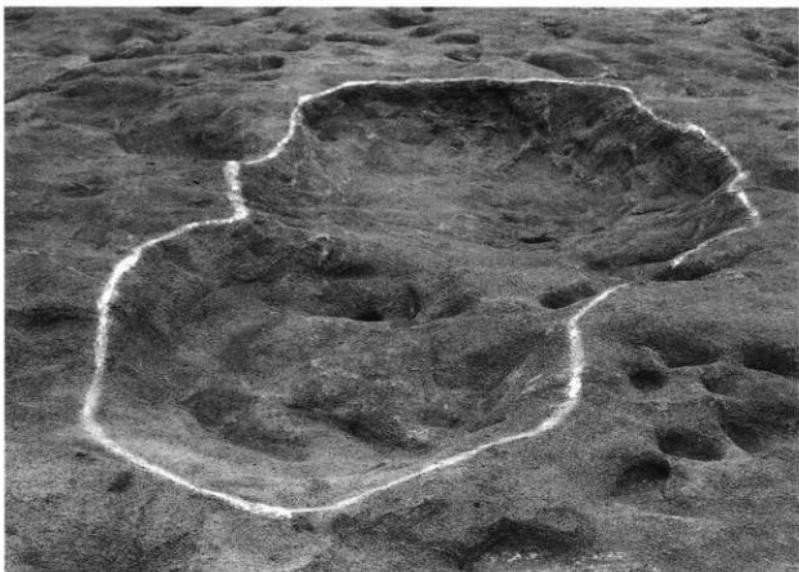


調査区北部遺構検出状況（南東から）

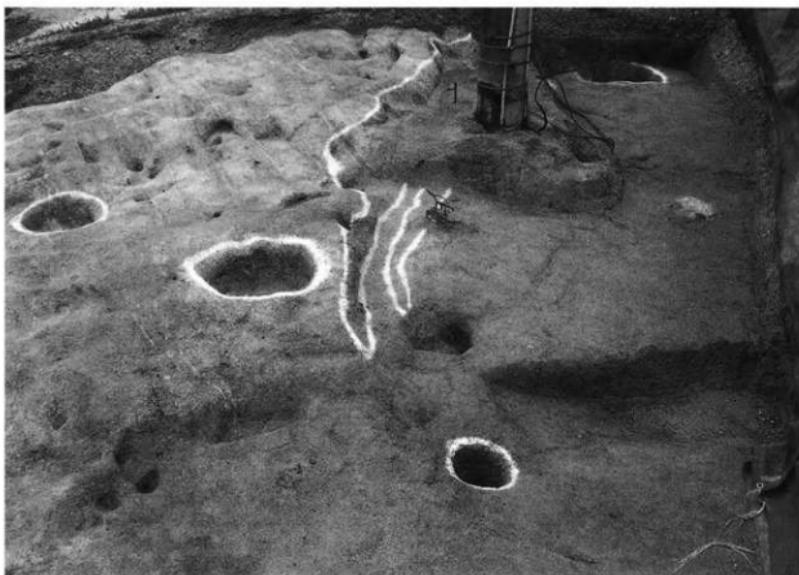


ピット検出状況（南東から）

図版20



SK01完掘状況（から）



SD01検出状況（東から）



SD01及びピット土層断面（東から）



石垣部サブトレンチ（北東から）

図版22



石垣振方、根石検出状況（北西から）



根石の状況（北から）



石垣基礎部土層断面（北東から）